

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIII - 3



1986. 3

滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIII — 3

1986.3

滋賀県教育委員会  
財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

県下のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに13年目を迎え、ほ場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られたその成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する御理解を深めて頂く一助にしたいと、ここに昭和60年度に実施いたしました発掘調査の報告書を4分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力頂きました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

## 例 言

1. 本報告書は、湖東地方における昭和60年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。
2. 本調査は、滋賀県耕地建設課からの委託により滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書には、蒲生郡蒲生町宮川遺跡、外広・呉坂塚遺跡、日野町田寺・下森遺跡の3遺跡を記載した。
4. 本事業の事務局は次の通りである。

### 滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩
課長補佐	中正輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
技師	葛野泰樹
管理係主事	山本徳樹

### (財)滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	大橋信弥
技師	仲川 靖
	岡本武憲
	吉田秀則
総務課長	山下 弘
主事	松本暢弘
	泉 喜子

5. 本書の執筆・編集は、調査担当者仲川靖・岡本武憲・森 格也・吉田秀則（調査三係技師）が行ない、担当は遺跡ごとに明記した。

また、遺物写真の撮影は寿福 滋氏の御協力を得た。

現地調査や整備作業等に御協力を頂いた調査員、調査補助員等の関係については各本文中に記載した。

6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

# 目 次

## I. 蒲生郡蒲生町宮川アリララジ遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査経過	2
4. 検出遺構	6
5. 出土遺構	7
6. ま と め	9

## II. 蒲生郡蒲生町外広・呉緩塚遺跡

1. はじめに	11
2. 位置と環境	11
3. 調査の概要	12
(1)遺 構	12
a. 竹田神社地区	12
b. 外広地区	23
c. 呉緩塚地区	30
(2)遺 物	31
4. ま と め	34

## III. 蒲生郡日野町田寺・下森遺跡

1. はじめに	35
2. 調査の方法と結果	35
(1)様式掘調査	37
(2)本調査	39
3. ま と め	56

# 挿 図 目 次

## I. 蒲生郡蒲生町宮川アリアラジ遺跡

第1図	調査トレンチ配置図	2
第2図	S D0103・S A0101平面図	3
第3図	S D0103・土器出土状況図	3
第4図	S B0101・S B0102平面図	4
第5図	第1トレンチ遺構配置図	5

## II. 蒲生郡蒲生町外広・呉坂塚遺跡

第1図	遺跡位置図	12
第2図	外広遺跡・調査地区配置図	13
第3図	竹田神社地区遺構平面図	15~16
第4図	竹田神社地区 溝1 板材出土状況実測図	14
第5図	竹田神社地区 掘立柱建物1	17
第6図	竹田神社地区 溝1 出土遺物実測図(須恵器)	18
第7図	竹田神社地区 溝1 出土遺物実測図(土師器・須恵器)	19
第8図	竹田神社地区 構1 出土遺物実測図(木器・石器)	20
第9図	外広地区1 遺構平面図	21~22
第10図	外広地区1 竪穴住居3・6 外広地区2 竪穴住居7	24
第11図	外広地区2 遺構平面図	25~26
第12図	外広遺跡出土遺物実測図(須恵器・土師器)	27
第13図	外広地区3・4 遺構平面図	28
第14図	呉坂塚地区 遺構平面図	30
第15図	呉坂塚 土層断面図	29

## III. 蒲生郡日野町田寺・下森遺跡

第1図	トレンチ配置図及び切土部分調査区	36
第2図	トレンチ土層断面柱状図	38
第3図	A区検出遺構図	40
第4図	竪穴住居跡(1)(SH1、SH2・3)	42
第5図	竪穴住居跡(2)(SH4、SH10)	43
第6図	竪穴住居跡(3)(SH5、南隅土器出土状況図)	44
第7図	竪穴住居跡(4)(SH6・8、SH7)	45
第8図	竪穴住居跡(5)(SH9、SH11、カマド、SH12)	46
第9図	B区検出遺構及びトレンチ配置図、A区SK3	47
第10図	出土土器(1)(須恵器)	50
第11図	出土土器(2)(須恵器・土師器・黒色土器)	51
第12図	出土土器(3)(土師器)	52
第13図	出土土器(4)(土師器)	54
第14図	出土土器(5)(土師器)、石製品	55

# 図 版 目 次

## I 宮川アリヲヲジ遺跡

- 図版一 宮川アリヲヲジ遺跡  
(上)第1トレンチ全景(北から)  
(下)第1トレンチ北端
- 図版二 宮川アリヲヲジ遺跡  
(上)第1トレンチ南半  
(下)第1トレンチS D0103・S A0101
- 図版三 宮川アリヲヲジ遺跡  
(上)第1トレンチS D0103土器出土状況  
(下)第1トレンチS D0103土層断面・墨書土器出土状況
- 図版四 宮川アリヲヲジ遺跡  
S I 0103出土遺物
- 図版五 宮川アリヲヲジ遺跡  
S D0103出土遺物
- 図版六 宮川アリヲヲジ遺跡  
(上)第1トレンチ北端出土遺物  
(下)S A0101周辺出土遺物
- 図版七 宮川アリヲヲジ遺跡  
出土遺物
- 図版八 宮川アリヲヲジ遺跡  
出土遺物

## II. 外広遺跡

- 図版一 (上)竹田神社地区 全景  
(下)竹田神社地区 溝1
- 図版二 (上)竹田神社地区 溝1 断面(b-b')  
(下)竹田神社地区 溝1 板材出土状況(南より)
- 図版三 (上)竹田神社地区 溝1 板材出土状況(北より)  
(下)竹田神社地区 溝1 遺物出土状況(南半部)
- 図版四 (上)竹田神社地区 掘立柱建物1(南東より)  
(下)竹田神社地区 掘立柱建物1 柱根遺存状況(pit 1)
- 図版五 (上)竹田神社地区 掘立柱建物2(北より)  
(下)竹田神社地区 掘立柱建物4 竪穴住居1(北より)
- 図版六 (上)外広地区1 全景(西より)  
(下)外広地区1 竪穴住居1・2・4・5(北より)

- 図版七 (上)外広地区1 竪穴住居3(南より)  
(下)外広地区1 竪穴住居3 カマド内土層堆積状況
- 図版八 (上)外広地区1 竪穴住居4・5(南より)  
(下)外広地区1 竪穴住居5 カマド周辺
- 図版九 (上)外広地区1 竪穴住居6 カマド(北より)  
(下)外広地区3 全景(南より)
- 図版十 (上)外広地区2 全景(南より)  
(下)外広地区2 竪穴住居7(南より)
- 図版十一 (上)外広地区4 全景(北より)  
(下)外広地区4 柱穴内遺物出土状況
- 図版十二 (上)外広地区4 竪穴住居8(西より)  
(下)外広地区4 竪穴住居8 カマド内土層堆積状況(南より)
- 図版十三 (上)具媛塚 遠景(南より)  
(下)具媛塚 土層堆積状況(a-a')
- 図版十四 (上)具媛塚地区 方形周溝墓(南より)  
(下)具媛塚地区 方形周溝墓 全景(北より)
- 図版十五 竹田神社地区 溝1 出土遺物(須恵器・土師器)  
竹田神社地区 溝5 出土遺物(須恵器)  
外広地区2 竪穴住居内土壇出土遺物(須恵器・土師器)  
外広地区1 竪穴住居内出土遺物(須恵器)
- 図版十六 (上)外広地区1 竪穴住居内出土遺物(土師器・須恵器)  
(下)竹田神社地区 出土遺物(須恵器)
- 図版十七 (上)竹田神社地区 溝1内 出土遺物(須恵器)  
(下)同 上
- 図版十八 (上)竹田神社地区 溝1内 出土遺物(須恵器)  
(下)同 上
- 図版十九 (上)竹田神社地区 溝1内 出土遺物(土師器)  
(下)外広遺跡 出土遺物(石製品)
- 図版二十 竹田神社地区 溝1 出土板材(9・3・8)
- 図版二十一 竹田神社地区 溝1 出土板材(1・6・2・5)
- 図版二十二 竹田神社地区 溝1 出土板材(4・7)・杭3・杭11・杭12

### III. 田寺・下森遺跡

- 図版一 (上)調査前全景 (南東より)  
(下)34トレンチ (試掘)
- 図版二 (上)A区 航空写真  
(下)調査風景
- 図版三 (上)A区 南半部遺構検出状況  
(下)A区 SH2~4
- 図版四 (上)A区 SH2 (南西より)  
(下)A区 SH3 (南西より)
- 図版五 (上)A区 南半部遺構検出状況 (西より)  
(下)A区 SH4 (北より)
- 図版六 (上)A区 SH10 (西より)  
(下)A区 SH7 (南より)
- 図版七 (上)A区 SH12 (南より)  
(下)A区 SH1 (南東より)
- 図版八 (上)A区 SK3  
(下)A区 SK3内出土土器
- 図版九 (上)A区 SH2 カマド  
(下)A区 SH11 カマド
- 図版十 (上)A区 SH10 カマド (南北断面)  
(下)A区 SH5 カマド (東)
- 図版十一 (上)A区 SH6の西の土器群  
(下)A区 SH13の焼土塊
- 図版十二 (上)B区 SH2  
(下)B区 SH1
- 図版十三 (上)B区 土層確認トレンチ  
(下)B区 土層断面
- 図版十四 竪穴住居跡、土壇出土須恵器 (坏蓋・坏身・高坏・横瓶)
- 図版十五 竪穴住居出土土器 (小型丸底壺・甌・壺)
- 図版十六 (上)A区 SK3出土土器  
(下)黒色土器、石製品 (砥石・紡錘車・石斧)

# I 蒲生郡蒲生町宮川アリヲヲジ遺跡

## 1. はじめに

本報告は、昭和60年度県営ほ場整備事業（蒲生南部地区宮川工区）に伴う蒲生町宮川遺跡の発掘調査にかかるものである。

宮川遺跡は、周辺に白鳳時代の寺院跡宮井庵寺の他、古墳時代中期の須恵器窯の辻岡山古窯址があり、昭和59年度の試掘調査で、丘陵すそ近辺で同時期の土器片を採集したため、ここに県営ほ場整備事業が実施されるにあたって事前に発掘調査を行い、遺構の有無と範囲を確認し、その保存を調べることとした。

なお、遺跡名は、蒲生町教委の分布図を参考に、小字名をとり、「宮川アリアヲジ遺跡」とした。

調査は、滋賀県教育委員会が同農林部から依頼をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

調査指導 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 技師葛野泰樹

財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財調査三係 係長大橋信弥

調査担当 同上 技師仲川靖

調査期間 昭和60年9月1日～9月27日

調査にあたっては、蒲生町教育委員会をはじめ、滋賀県農林部耕地建設課、同八日市県事務所土地改良第二課の方々に協力を仰いだ。また、蒲生町教育委員会技師北川浩氏には調査の全般にわたって、多くの協力と教示を得た。とくに記して感謝する。

なお、本報告の執筆、編集には仲川があたった。

本文中に使用した遺構の略記号は次のとおりである。

S B：掘立柱建物 S D：溝状遺構 S A：棚列跡

数字の上二桁は、それぞれの排水路敷きに設定したトレンチ番号を表わす。

## 2. 位置と環境

宮川アリアヲジ遺跡は滋賀県蒲生郡蒲生町宮川地先に所在する。宮川地区は蒲生町の南西部にあり、竜王町と境を接し、水口丘陵の北端に位置する。今回の調査地点は、水口丘陵の東側にあたり、標高は概ね120.00m前後を測る。

遺跡の東方には、鈴鹿山系に端を発する日野川が流れ、水口丘陵との間にわずかの平坦部を有し、この平坦部に遺跡が集中する。

宮川アリアヲジ遺跡の北方には、白鳳時代創建の寺院跡である宮井庵寺<sup>(1)</sup>があり、寺院をとりまく

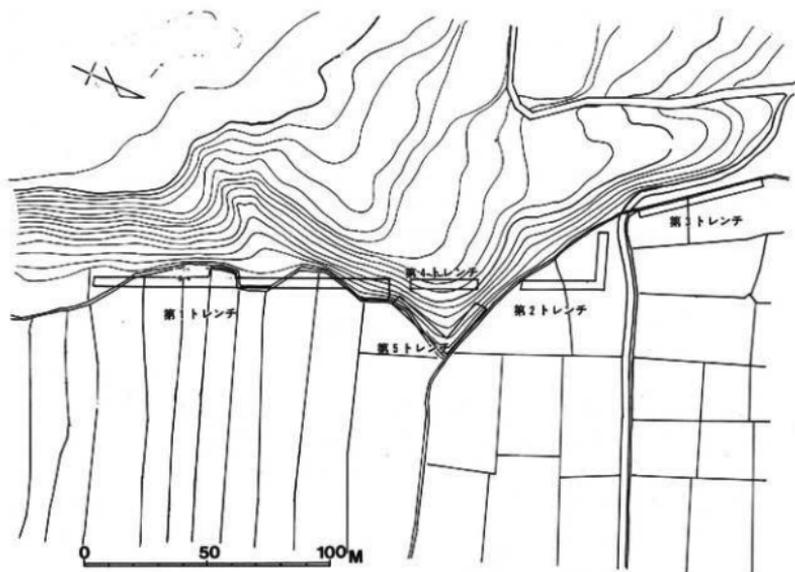
形で、同時期の集落跡が検出されている。また、南方には、滋賀県で唯一の検出例である瓦器碗を焼いた窯跡がある蒲生堂庵寺<sup>(2)</sup>がある。さらに、遺跡の西方、丘陵の反対側に古墳時代中期の須恵器を焼いた登り窯が検出された辻岡山A遺跡<sup>(3)</sup>が存在する。当遺跡の範囲内にも、「鐘つき堂」の小子が残る土地があり、寺院跡の存在が予想されていたが、近年丘陵上で宮井庵寺出土の瓦と同じものが出土、表採されることより宮井庵寺に使用された瓦を焼成した窯跡の存在が有力視されている<sup>(4)</sup>。

### 3. 調査経過 (第1図)

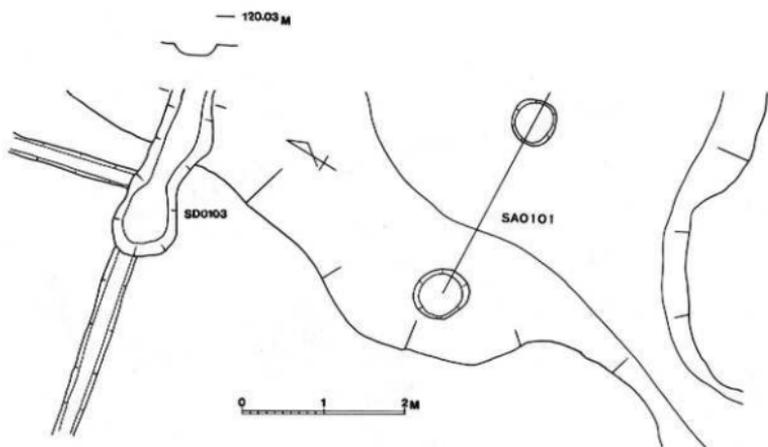
本年度の調査地点は、蒲生南部地区宮川工区の西部にあたる。昭和59年度の試掘調査により、切土面の削減を行い盛土による計画変更を行い、登り窯跡、灰原跡の存在が予想される丘陵部すその第9号小排水路敷のみに限定した。トレンチは延長300mで、途中、丘陵を削る切り通し部分を境に南から1～3トレンチ、丘陵突出部の削平部分に4～5トレンチを設定した。

第1トレンチでは、北端部と中央部に遺構が集中しており、耕土直下、現地表下20～30cmで砂礫層もしくは粘土層の地山に達した。

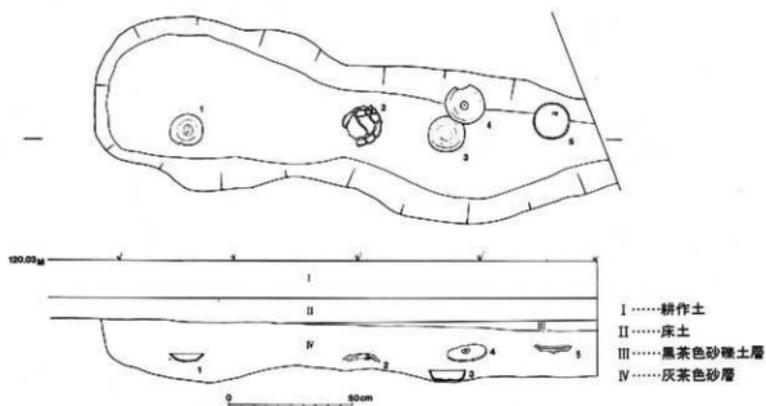
第2トレンチ、第3トレンチは、遺構・遺物とも少なく、かなりの削平を受けていた。



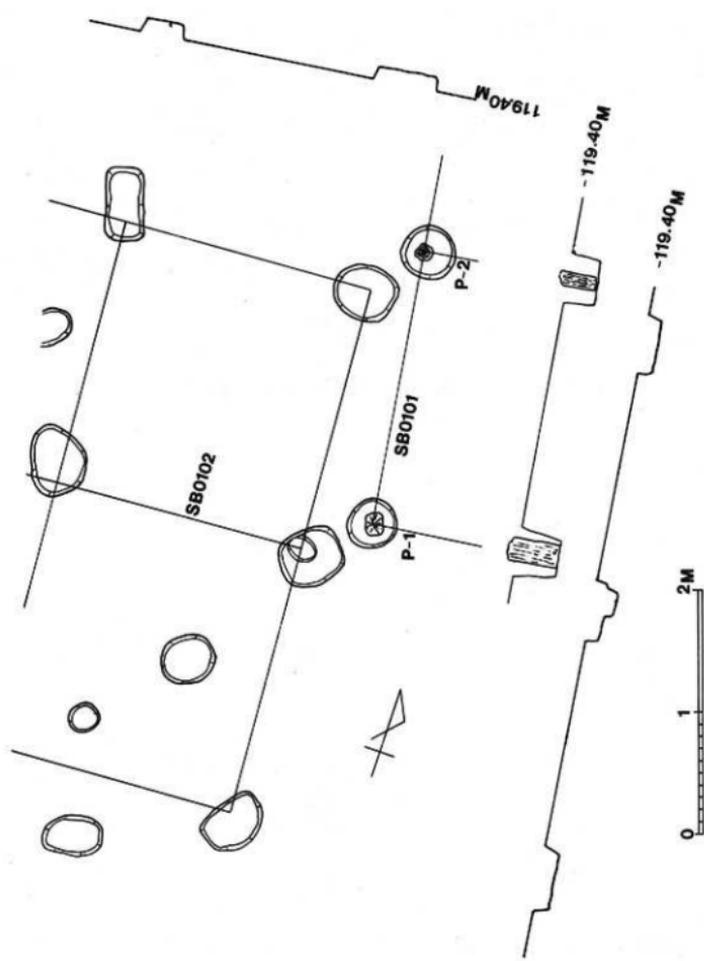
第1図 調査トレンチ配置図



第2图 SD0103·SA0101 平面图



第3图 SD0103 土器出土状况图



第4圖 SB0101・SB0102 平面圖



第4・第5トレンチは、登り窯の有無を確認するにあたり、斜面、およびす部を調査したが、丘陵の延長からなるもので、斜面下の平坦部も自然崩壊による堆積であった。

現地調査は、昭和60年9月1日より開始し、第1号トレンチから順次、機械力による表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業などを行い、昭和60年9月27日に終了した。

## 4. 検出遺構

### 第1トレンチ (第5図)

基本層序は第1層耕土、以下床土、暗黒茶色砂質土である。ただし、トレンチ北側は後世の土砂崩れにより、厚さ2mの黄褐色バイラン層が堆積している。遺構面はややしまった灰色砂礫土層もしくは青灰色粘土層で、標高120m前後を測る。ここでは、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構4条、柵列2基、自然流路跡を検出した。

#### S B0101 (第4図)

トレンチ内で南北2間分の柱穴を確認した。東西1間以上、南北2間以上の建物になるものとみられる。柱間距離は、南北で2m30cmを測る。柱穴は30~40cmの円形で、深さは40~50cmである。2基とも柱の基部が残っており、P-1のものは丸太を半載したもの、P-2のものにはほぞがうがっており、いずれも転用材である。建物の方位は、ほぼ南北を示している。

#### S B0102 (第4図)

南北2間分、東西1間分の柱穴を検出した。南北2間、東西1間以上のほぼ東西を示す総柱の東西棟になる建物と思われる。柱間距離は、南北列が2m20cmと2m25cm、東西列が2m30cmを測る。柱穴は、30~40cmの円形または隅形で、深さは20cm前後と浅い。西より中央の柱穴より土師質土器の皿と須恵器片が出土している。遺物より奈良時代末から平安時代初め頃のものと思われる。S B0101より先行する建物とみられる。

#### S D0101

トレンチ南端で検出した幅250cm、深さ20cm前後の溝である。遺物の出土はない。

#### S D0102

S D0101に隣接する溝で幅100cm、深さ15cm前後のものである。遺物の出土はない。

#### S D0103 (第2図、第3図)

トレンチの中央付近で検出した幅60~80cm、深さ25~30cm前後のほぼ東西に流れる溝で、溝の西端から2m50cm分をトレンチ内で確認した。溝はさらに東へ延びているものとみられる。溝内は暗灰茶色砂が堆積しており、肩部および中層より完形品の須恵器杯2点(1・3)、同じく蓋2点(4・5)、土師質土器杯1点(2)が出土している(第3図、図版2)。

#### S D0104

S D0103に南東隅が接するL字状の溝で、幅20cm、深さ5cmを測る。S D0104を切っており埋没後に作られたものである。

#### S A0101 (第2図)

S D0103に平行する溝で、棚の西端にあたる柱穴2基を検出した。柱間距離は2m50cmを測り、柱穴は30~40cm前後の円形で、深さは20~25cmである。S D0103との距離は3m80cmを測る。

#### S A0102

S B0101、S B0102を画する溝とみられる。トレンチ内で柱穴2基を検出した。柱間距離は1m50cmで、柱穴は30~40cmの円形もしくは方形で、深さは20cm前後である。

その他、トレンチの両端で、流木片を含む自然流路の他、S A0101周辺で須恵器、土師質土器片を多量に含む深さ10~15cm前後の落ち込みと、S B0101南で、上層に灰釉陶器片が散布する10~15cm前後の落ち込みを検出した。

#### 第2トレンチ (第1図)

丘陵部突出部をはさんで、第1トレンチの延長上にあるL字のトレンチで、基本層序は第1層耕土、以下床土、黄灰色粘性砂質土である。遺構面は、黄灰色粘性砂質土で、それを10cm程削ると、青灰色粘土層の地山が露呈する。遺構は第1トレンチの延長上から中程で西へ屈曲するトレンチの中央やや西よりで、溝状2条を検出した以外は、トレンチ両端で自然流路を確認したのみである。

#### S D0201

トレンチを南東から北西方向へ横断する幅60cm、深さ20cmの溝で、黒褐色粘性質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### S D0202

S D0201に平行する溝で幅20cm、深さ10cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 第3トレンチ (第1図)

第2トレンチ西端から農道をはさんで北に約100mを設定した。基本層序は第2トレンチと同じであるが、北側は、自然流路跡で、南側で若干の遺物の散布をみた以外は遺構は存在しなかった。

#### 第4トレンチ、5トレンチ

丘陵部が舌状に突出する部分で、第1トレンチと第2トレンチの間に位置する。現状は頂部で雑木が茂っており、途中より崩落して一部地山が露頭している。露頭面と水田面の間に平坦部があり、同じく雑木が茂っている。瓦窯、須恵器の登り窯、あるいは灰原等が存在しないか確認する為、斜面、およびフラットの部分の精査をしたが、遺構、遺物とも存在せず、黄褐色バイラン層による地山のみに最下層は青灰色粘土層であった。

## 5. 出土遺物

遺物の出土は僅少であるが、第1トレンチS D0103より完形品が5点出土している。

1~5はS D0103出土の土器で、1は、口径12.8cm、器高3.7cmを測る須恵器の碗である。全体にややひずんでおり、底部に安定性を欠く。口縁部は外上方に開き、端部はやや丸く収める。2は、口径12.6cm、器高2.6cmの土師器の皿で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部との境に甘い稜をとる。口縁部は、やや外反したあと、端部をつまみ出し、丸く収める。端部内面に沈線を施し、全体にていねいな磨き調整を施す。体部内面にラ線状暗文を、口縁内面に放射状暗文を付す。焼成は良好で赤褐色

を呈している。3は、口径14.6cm、器高4.5cmの帖付け高台を有する須恵器杯身で、腰部から外上方に開く体部を成し、口縁端部を丸くおさめる。全体にいいねいな回転横ナデを施す。高台部は外上方へふんばり、腰部と体部の境に貼りつける。接地面は内側につく。器壁はかなり厚く、焼成は良好である。灰色を呈する。4は、口径15.0cm、器高2.7cmの須恵器の杯蓋で、天井部中央に扁平な径2.8cmのつまみがつく。天井部は低平で、口縁部がやや稜をもって開き、口縁部は内側へ屈曲させている。調整は天井部外面をヘラ削り、その他の部位は横ナデである。焼成は良好で、天井部外面に自然釉が付着する。淡灰色を呈する。5は口径15.6cm、器高2.9cmの須恵器の杯蓋で天井部中央に扁平な径3.0cmのつまみがつく。形態・手法上の特徴は4の杯蓋と同じである。内面に、「[径]もしくは「[阿]」の異体字とみられる墨書が記されている。1～5の土器は、いずれも8世紀中頃に位置づけられよう。<sup>(8)</sup>

6～14は、SA0101付近の落ち込み内包含層より出土した土器である。

6は、須恵器の杯蓋のつまみで径2.6cmを測る。扁平な形態で、4・5の杯蓋と同時期とみられる。7は、口径16.8cmの須恵器の杯蓋で、形態・手法上の特徴は4・5と同じである。8・9・10は須恵器の杯身で、外上方に直線的に開く体部を成し、口縁端部は丸くおさめる。口径は8が12.4cm、9は13.0cm、10は13.0cmを測る。内外面ともヨコナデ調整で、焼成は良好である。色調はいずれも灰色を呈する。

11は、須恵器の杯身で、高台を有する。貼り付け高台で、やや外にふんばる。接地面は内側にある。焼成は良好、灰色を呈する。

12は、口径12.0cmの蓋で、外反する口縁部を成し、口縁端部に直立する。調整は内外面ともヨコナデ、焼成は良好、明灰色を呈する。

13は、須恵器の蓋で、大型のものになる。天井部中央に、やや外上方にのびる高台を逆にしたようなつまみをつける。焼成はやや軟質で、色調は灰色を呈する。

14は口径20.8cmの広口壺の口縁部で、外上方に開く形態である。端部は丸く取める。調整は内外面ともにヨコナデで、焼成は良好、外面に自然釉が付着する。

6～14の土器は、いずれも8世紀初頭から中頃のものに比定されよう。

15～20は、SB0102南の遺構面上より出土した灰釉陶器である。高台は断面三日月形の15～17のタイプと、外へふんばる長方形の10～20のタイプがある。高台は貼り付け高台で、一部釉の認められるものがある。折戸53号窯式に比定できるものである。<sup>(6)</sup>

21・22はSB0102の柱穴埋土中より出土した土器で、21は肩がやや張った水瓶とみられる。22は、土師皿で、逆台形状の高台を底部と体部の境に付す。

23・24・25は、第2トレンチ遺構面上より出土した土器である。

23は、須恵器の高杯で、内傾ぎみに立ち上がり杯部付近でやや外反する脚部を成す。三方に円形の彫かし穴を施す。焼成は軟質で、色調は灰茶色を呈する。

24は、口径14.2cm、器高3.7cmの須恵器の杯身で、内湾ぎみの体部を成し、受部はやや外上方にのびる。口縁部はやや内傾ぎみにのびる。調整は、底部ヘラ削り、その他の部位はヨコナデである。焼成は良好、色調は灰色を呈する。6世紀中頃に比定できよう。

25は、須恵器の杯身で、内湾ぎみに立ち上がる体部を成す。底部はヘラ切り末調整で、焼成は良好、色調は灰色を呈する。6世紀後半に位置づけられる。

## 6. ま と め

今回の調査では、掘立柱建物跡2棟をはじめ、溝・棚列などの遺構を検出した。

調査範囲が限定されたため、遺構の広がりについては不明であるが、おそらく東側に延びるものとみられる。中でも、S D0103は、幅こそないが、完形品の土器が調査範囲の2mの間で5点出土したことは、特筆すべきことである。そのうち1点には、墨書が記されており、奈良時代初頭から中期にかけての当遺跡の性格を裏付ける資料といえる。遺構が、いずれも、宮井廃寺の中軸線に合う点、さらに、棚列等で建物を区画する等からして、宮井廃寺の南側に位置する集落で、しかも宮井廃寺と密接な関係をもつものが居住していた集落と考えられる。同様の性格をもつ集落は、宮井廃寺の北に位置する野瀬遺跡<sup>(7)</sup>でも検出されているが、今後、これらの資料を加味して再検討を要するものと思える。

また、今回の調査では、細片ではあるが、縄目の瓦痕がある平瓦が出土しており、当遺跡の西に位置する丘陵上に瓦窯の存在する可能性が考えられる。今後の調査が期待されるところである。

注(1) 『宮井廃寺跡』(1985) 蒲生町教育委員会 滋賀大学考古学ゼミナール

(2) 蒲生町文化財資料集(2) 『町内遺跡分布調査報告書』(1985) 蒲生町教育委員会

(3) 『昭和五十年 滋賀県文化財調査年報』「蒲生町宮川窯跡の須恵器について」滋賀県教育委員会

(4) 同注(1)

(5) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書』VII (1976) 他

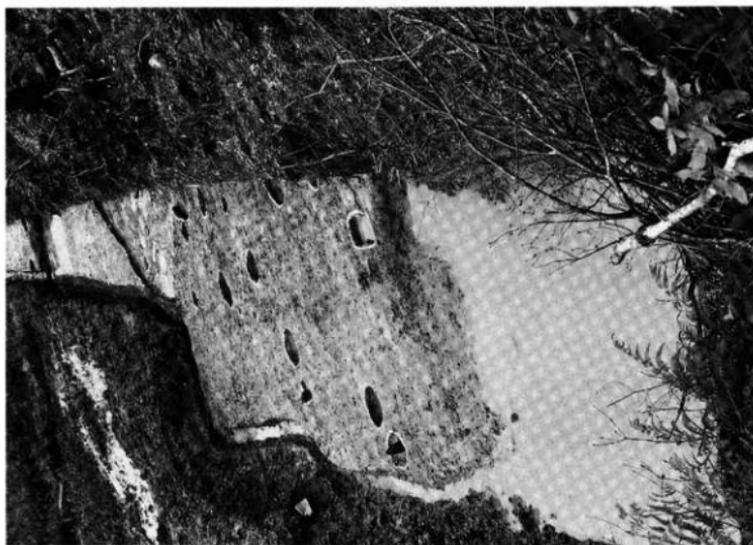
(6) 植崎彰一・斉藤孝正「猿投窯編年の再検討について」(シンポジウム「平安時代の土器・陶器」)

(7) 同注(1)

圖 版



1 第1トレンチ全景(北から)



2 第1トレンチ北端



3 第1トレンチ南半



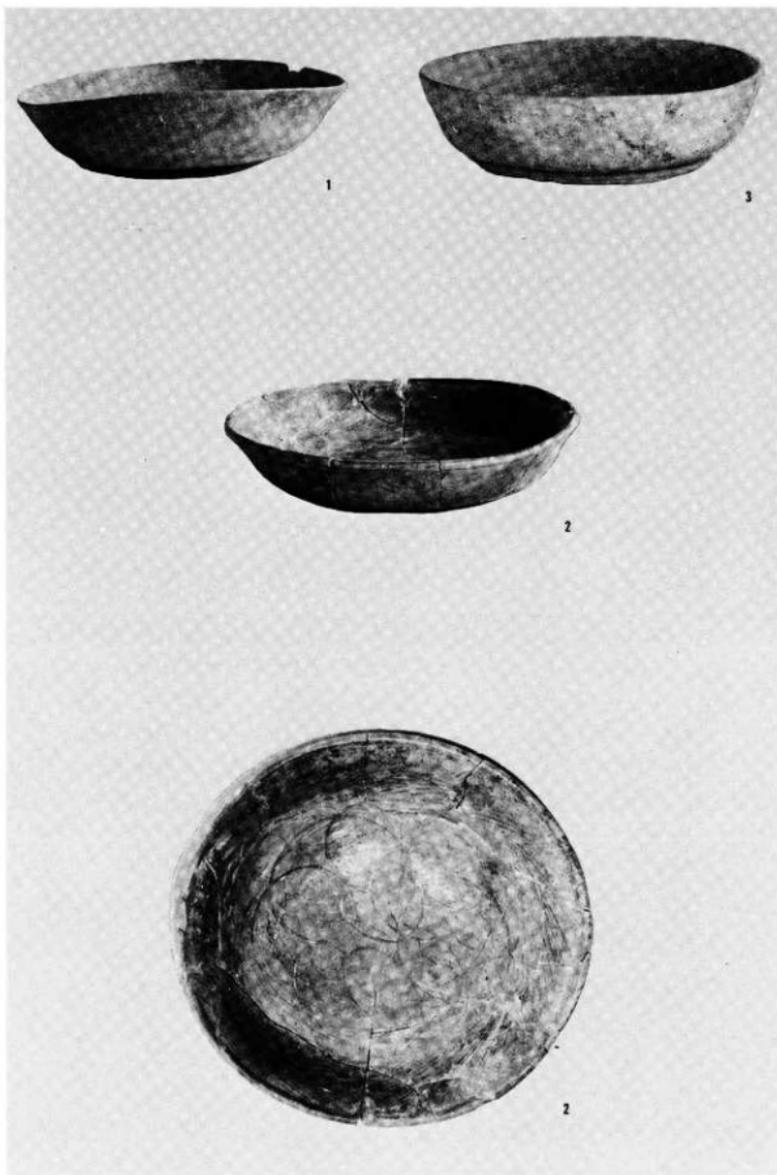
4 第1トレンチ SD0103 SA0101

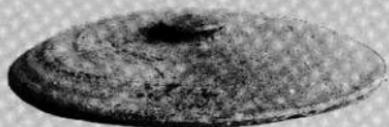


5 第1トレンチ SD0103 土器出土状況

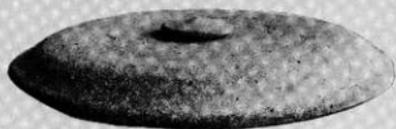


6 第1トレンチ SD0103 土層断面 墨書土器出土状況

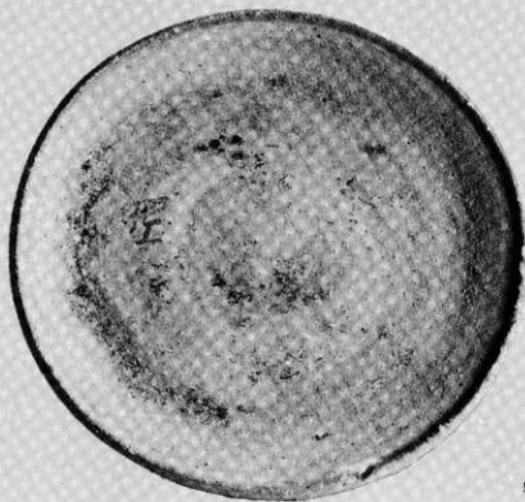




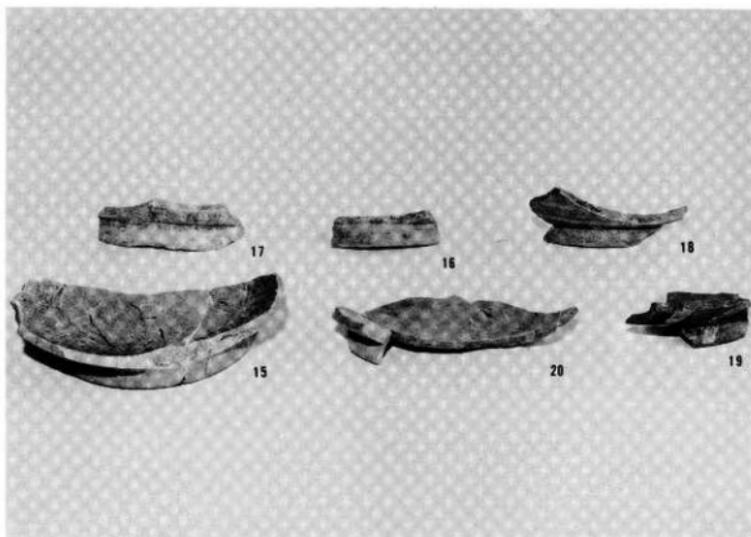
4



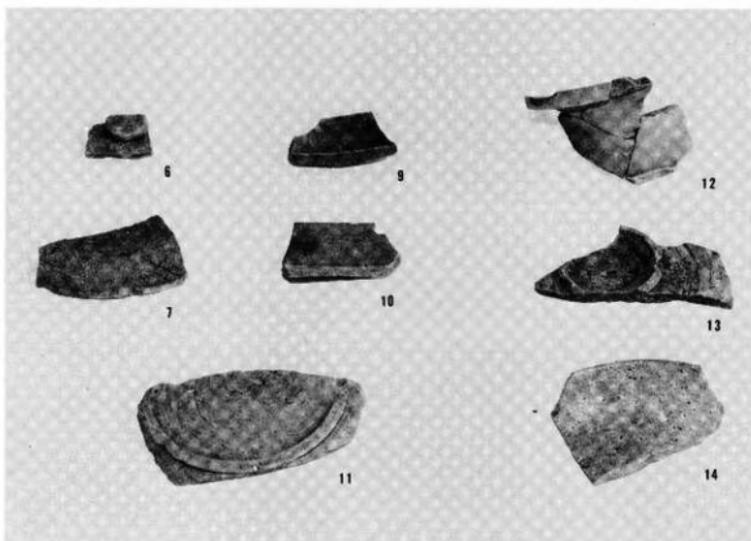
5



5

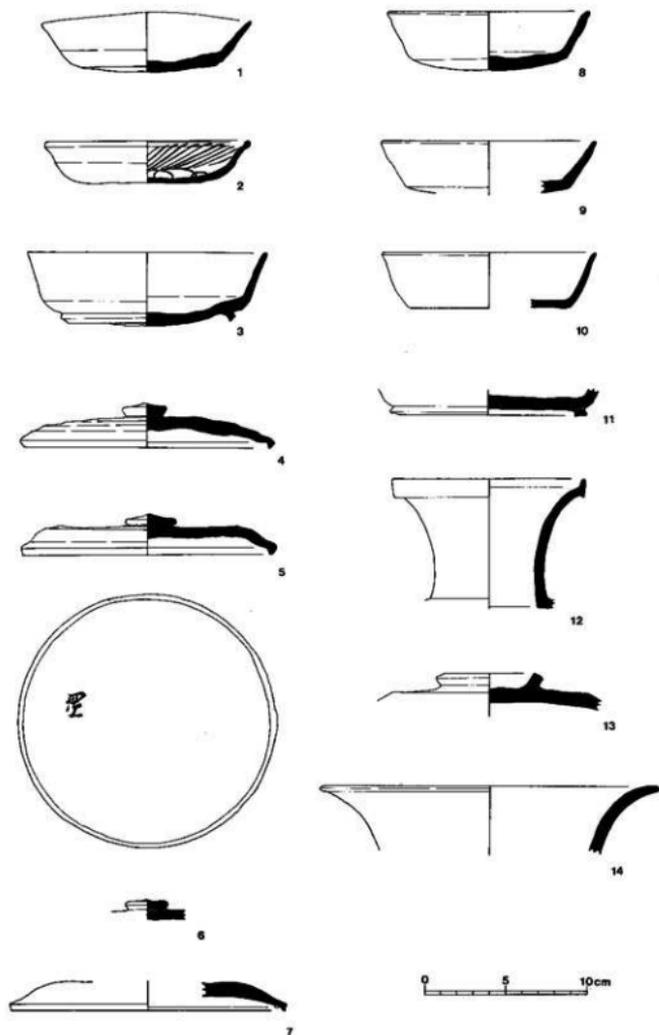


9 第1トレンチ北端出土遺物

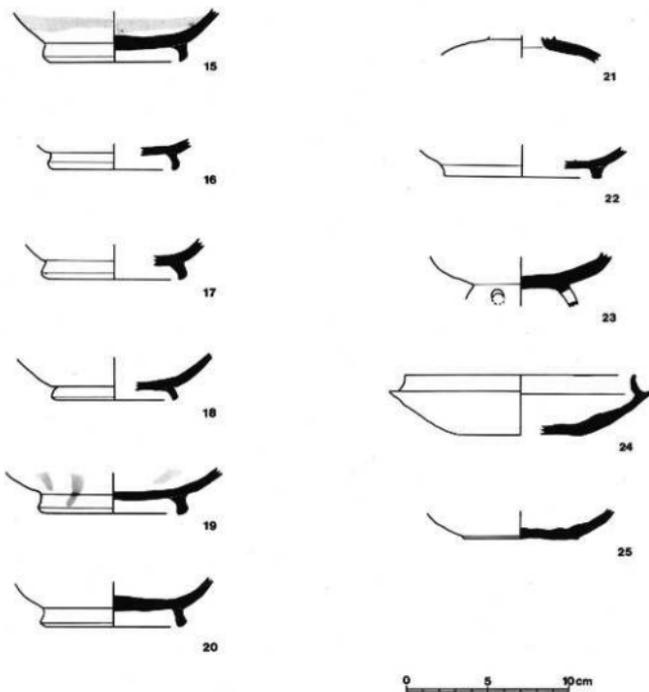


10 SA0101 周辺出土遺物

図版七 宮川アリヲヲジ遺跡



宮川アリヲヲジ遺跡出土遺物(1~5 SD0103、6~14 SA0101周辺)



宮川アリヲヲジ遺跡出土遺物(15~20・26~28・1トレ北、21・22・SB0102ピット内、23~25・2トレ南)

## II 蒲生郡蒲生町外広・吳媛塚遺跡

## 1. はじめに

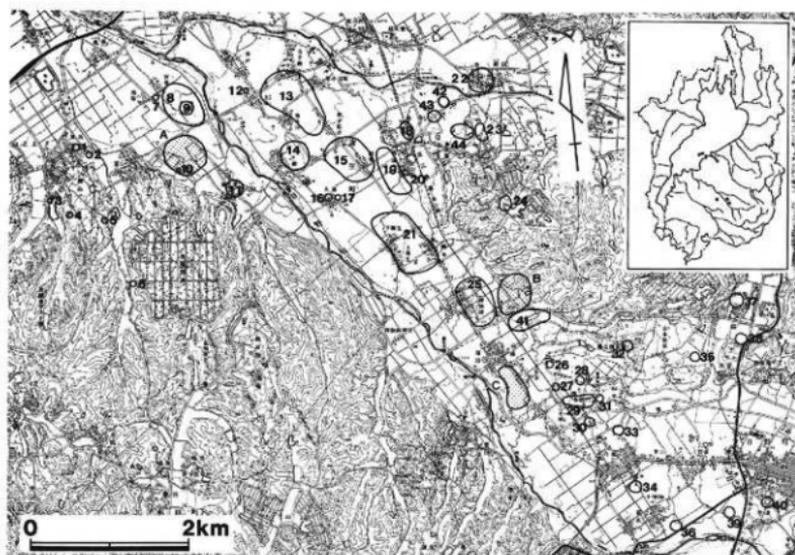
本報告は、滋賀県が実施した昭和60年度県営ほ場整備事業（蒲生郡蒲生町南部地区鍔物師工区）に伴う発掘調査の成果である。当該地区内には真椋塚が古墳として周知されていた。その後、昭和57年度以降の分布調査の結果、遺跡の存在が判明して外広遺跡と命名された。昭和59年度、ほ場整備に先立って、県教育委員会が試掘調査を行ない、古墳時代後期から平安時代末までの遺構・遺物を検出した。この結果に基づき、県農林部と県教育委員会が協議を行ない、遺構の保存策を講じ得ない6000㎡について本調査を行なうこととなった。

本調査には県文化財保護協会技師岡本武憲が担当し、調査員佐竹章吾の全面的な協力を得た。また、調査に際し、地元鍔物師地区、町教育委員会北川浩氏、その他多数の人々の協力を得た。記して感謝したい。

## 2. 位置と環境

当遺跡は、蒲生郡内を流れる日野川の中流域右岸、日野丘陵から西に開谷した扇状地状の緩傾斜部に位置する。昭和59年度の調査で、和銅開珎100枚を出土して有名な日野町宮の前遺跡は南接しており、出土遺物・遺構ともに当遺跡と重複する弥生時代後期から平安時代にかけての集落である。したがって、外広遺跡と宮の前遺跡は景観的には同一集落と考えられる。

日野川中流域、蒲生町・日野町内は右岸に段丘が発達し、安定した平野部を形成している。水田化する以前の段丘上には、日野川より分流した小河川が縦横無尽に流れており、内陸部ながら、早くから水稲耕作に必要な条件を備えていた。外広遺跡でも、弥生時代後期の方形周溝墓1基を検出している。南へ150mの宮の前遺跡からも弥生時代後期の土器を一括出土している。さらに古くは、日野町内池遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓5基、蒲生町市子遺跡でも中期の方形周溝墓20基、野瀬遺跡でも6基、麻生遺跡では後期の方形周溝墓3基を検出するなど、日野川中流域の弥生時代の集落分布と変遷を考えるうえで貴重な発見が相次いでいる。つづく古墳時代では、宮の前遺跡で5世紀の大溝より多量の木製品を出土している。6世紀になると、内池遺跡で竪穴住居14棟、田寺・下森遺跡で10数棟、宮の前遺跡で1棟、外広遺跡で3棟、麻生遺跡で10数棟（5世紀を含む）の住居を検出しており、急速な集落形成の一端を示している。各遺跡は1～2kmの間隔で日野川右岸に列しており、集村化と人口圧の違いはあるが、現在の集落分布とほとんど同じ密度で遺跡が分布する。つづく、白鳳、奈良、平安時代には、外広遺跡に近接した日野丘陵の谷筋に岡本古窯跡（7世紀後半）がある他、蒲生町内には塔・金堂などが調査された宮井廃寺をはじめ、蒲生堂廃寺、綺田廃寺、日本最古の三重石塔で有名な石塔寺など、古代寺院跡が集中する。これら古代寺院建立の背景をどう捉えるかは今後の課題であるが、湖東地域のなかでも卓越した経済力・政治力を持った有力氏族が居住していたことは容易に想像できる。平安時代後期以降の山部神社文書等で確認できる荘園は、麻生を中心とした麻生庄（麻生遺跡）、市子殿・川原・松井周辺の市子庄（市子遺跡）、宮川周辺の宮川保などがある。



第1図 遺跡位置図

A 室阿リアツツ遺跡	7 堂の前遺跡	17 塚町古墳	27 小谷古墳	37 大谷北遺跡
B 外広遺跡	8 野瀬遺跡	18 大塚城跡	28 小御門A遺跡	38 大谷古墳
C 田寺・下森遺跡	9 宮井廃寺	19 杉ノ木遺跡	29 小御門古墳群	39 狐塚遺跡
1 東出北遺跡	10 辻岡山古窯跡	20 頂塚古墳	30 小御門城遺跡	40 日枝社遺跡
2 東出南遺跡	11 蒲生堂廃寺	21 麻生遺跡	31 小御門C遺跡	41 宮ノ前
3 小路高道遺跡	12 上南城跡	22 繪田廃寺	32 月ヶ岡遺跡	42 飯道塚古墳群
4 鈴ヶ塚遺跡	13 市子遺跡	23 七ツ塚古墳群	33 内地遺跡	43 切刺遺跡
5 法教寺遺跡	14 堂田遺跡	24 阿本古窯跡	34 猫田遺跡	44 山端遺跡
6 法教寺遺跡	15 飯ヶ塚古墳	25 神開遺跡	35 正明寺遺跡	
	16 大森城跡	26 小谷城跡	36 十禅師遺跡	

### 3. 調査の概要

#### (1) 遺構

調査区は大きく3つに分かれる。それぞれ竹田神社地区、外広地区、呉媛塚地区とした。

#### a. 竹田神社地区 (第3～8図、図版一～五)

竹田神社の南西に隣接して3,000㎡を調査した。検出した遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟、溝5条、ピット群である。

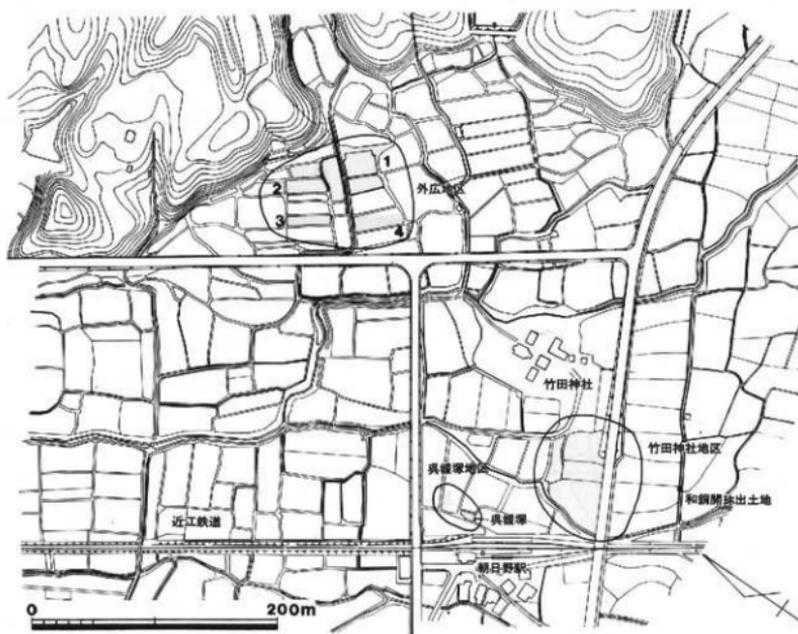
(竪穴住居1) 方形で、東壁の中央よりやや南にカマドを構築する。カマドの遺存状況は悪く、煙

道部の床と多量の炭によってカマドと判断した。柱は4本柱と思われるが、通常の位置では2ヶ所しか検出し得なかった。堅穴の規模は東西4.2m、南北4.2m、深さ0.15mで、4辺を正方位に向けて構築されている。遺物は埋土中に6世紀後半の須恵器、土師器片を少量含んでいた。

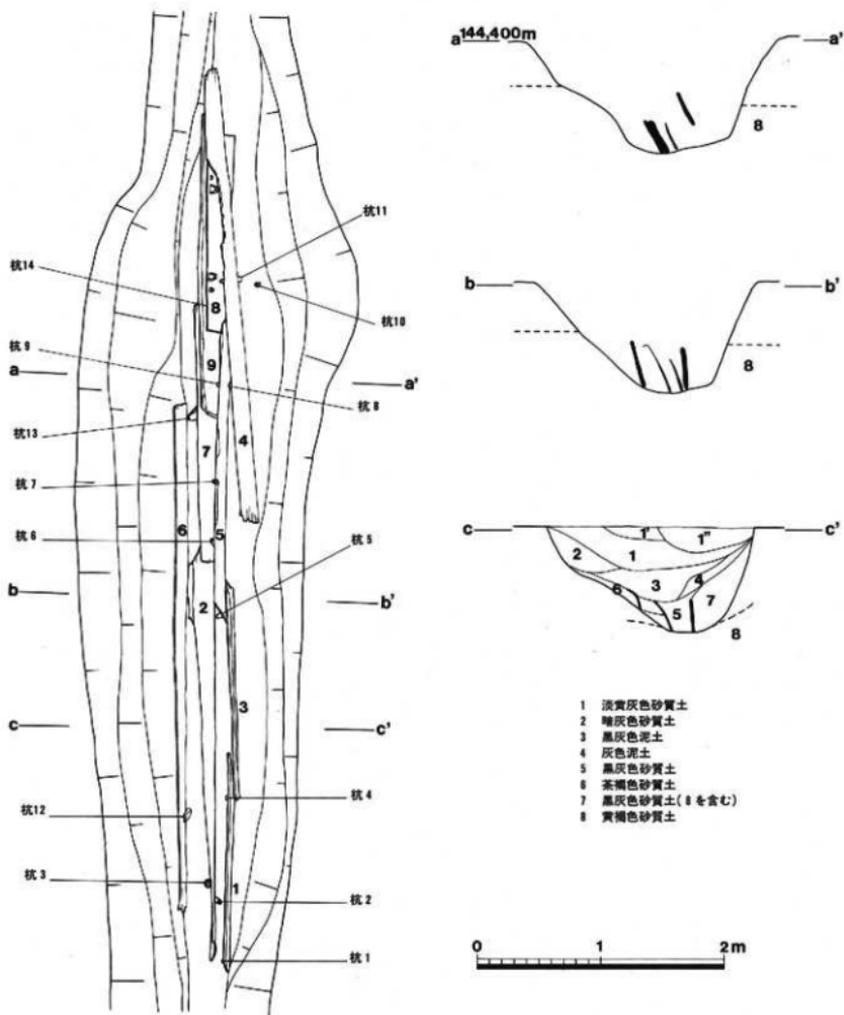
(溝1) 今回の調査で出土した遺物の大半はこの溝内埋土からのものである。溝はトレンチ東部を南北方向に掘削されており、平均幅1.6m、深さ1.2mを計るいわゆるV字溝である。トレンチ内での溝の延長は38m、南へ約70mの地点でも延長と考えられる溝を検出している。この溝で注目されるのは、地山が砂地で崩れやすい7.5mについて護岸工事が施されていた。これは、9枚の板材を杭で支えたものである。板材は長さ170~420cm、幅21~41cm、厚さ1.4~5.6cmと様々で、加工痕もあることから大半が建築部材等の転用材であろう。板材は重なり合った状態で出土しており、杭の位置にも規則性がないことから、数度の補修があったものと考えられる。この溝からは、整理箱で約10箱分の遺物が出土した。とくに堅穴住居1に近接した溝内からの出土量が目立った。層的には中位に遺物が多かったが、層位による土器形式差はなく、6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器、土師器が混在して出土している。(第6~8図)

(掘立柱建物1) 梁行3間(4.5m)、桁行5間(8.2m)の南北棟で、本調査区内では一番大きな建物である。建物の主軸は磁北に対して、3度西へ振っている。16本の柱のうち、3本に柱根が残っていた。

(掘立柱建物2) 梁行3間(3.9m)、桁行4間(5.1m)で、主軸は磁北より70度西へ振る。建物方



第2図 外広遺跡 調査地区配置図



第4图 竹田神社地区 溝1 板材出土状況実測図



第3図 竹田神社地区 遺構平面図

位、規模ともに他の建物と異なっている。

(掘立柱建物3) 梁行2間(3.3m)、桁行は不明である。掘立柱建物1・4と主軸方位を一致させている。

(掘立柱建物4) 梁行2間(3.8m)、桁行3間以上で、掘立柱建物1・3と主軸方位を一致させている。竪穴住居1の廃絶後に建てられている。

(掘立柱建物5) 梁行1間(1.7m)、桁行2間(3.4m)で、主軸は磁北より6度西へ振る。

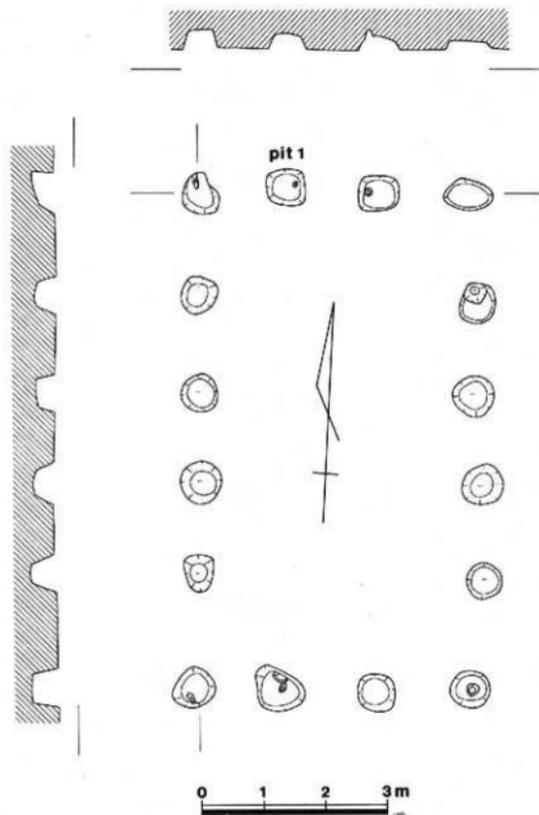
(掘立柱建物6) 梁行2間(3.3m)、桁行2間(3.1m)の総柱建物で、柱間は一定せず、平面プランは著しくひずむ。

(溝2) 掘立柱建物1の柱穴を切って南東から北西へ流れる。幅0.3m、深さ0.15mを計る。

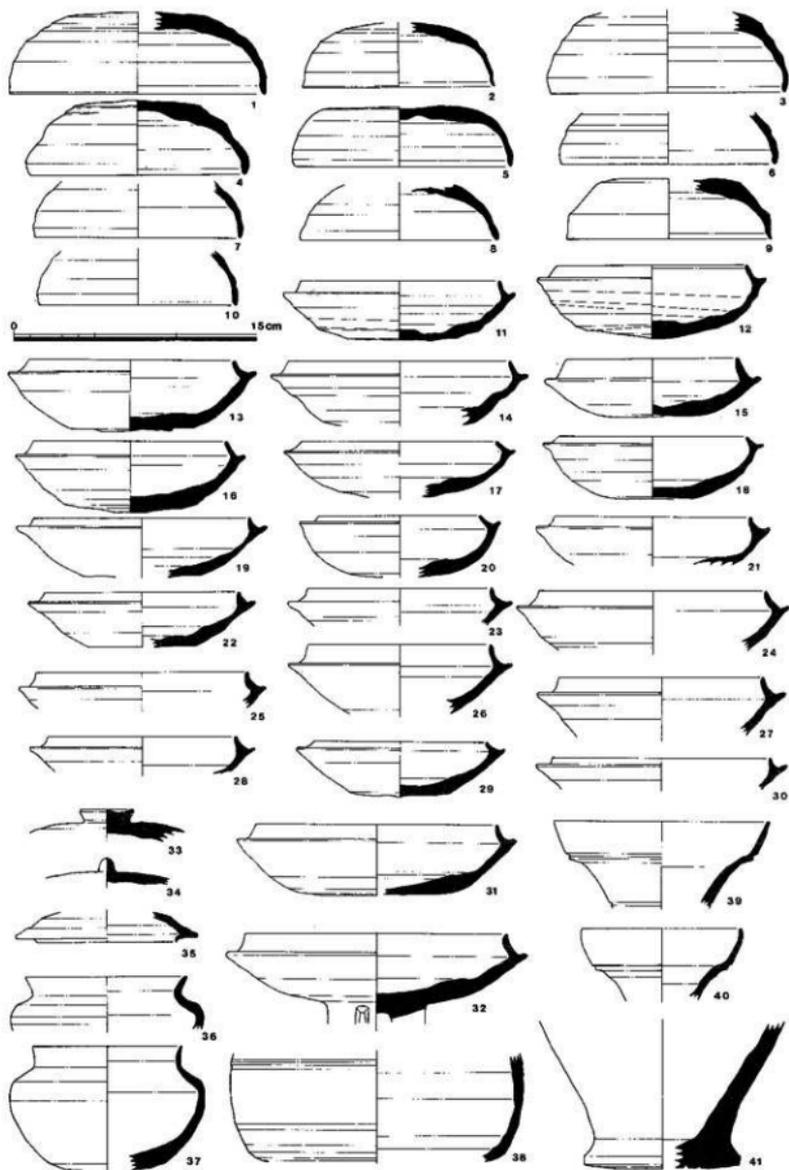
(溝3) 幅1m、深さ0.2mの南北溝で、磁北より20度西へ振る。

(溝4) 調査前の水田畦畔に伴う溝で、幅0.4m、深さ0.2mを計る。

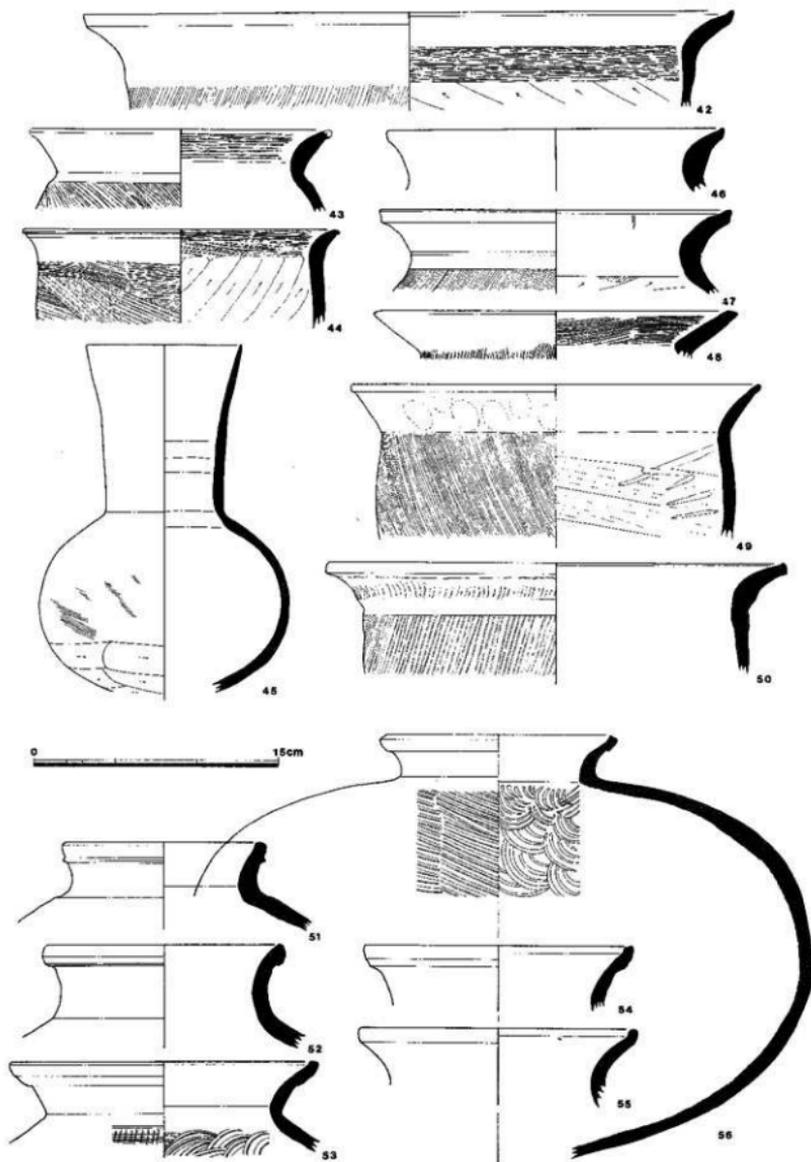
(溝5) 幅1m、深さ0.3mの南北溝で、溝内より8世紀後半の須恵器(第12図69)を出土した。



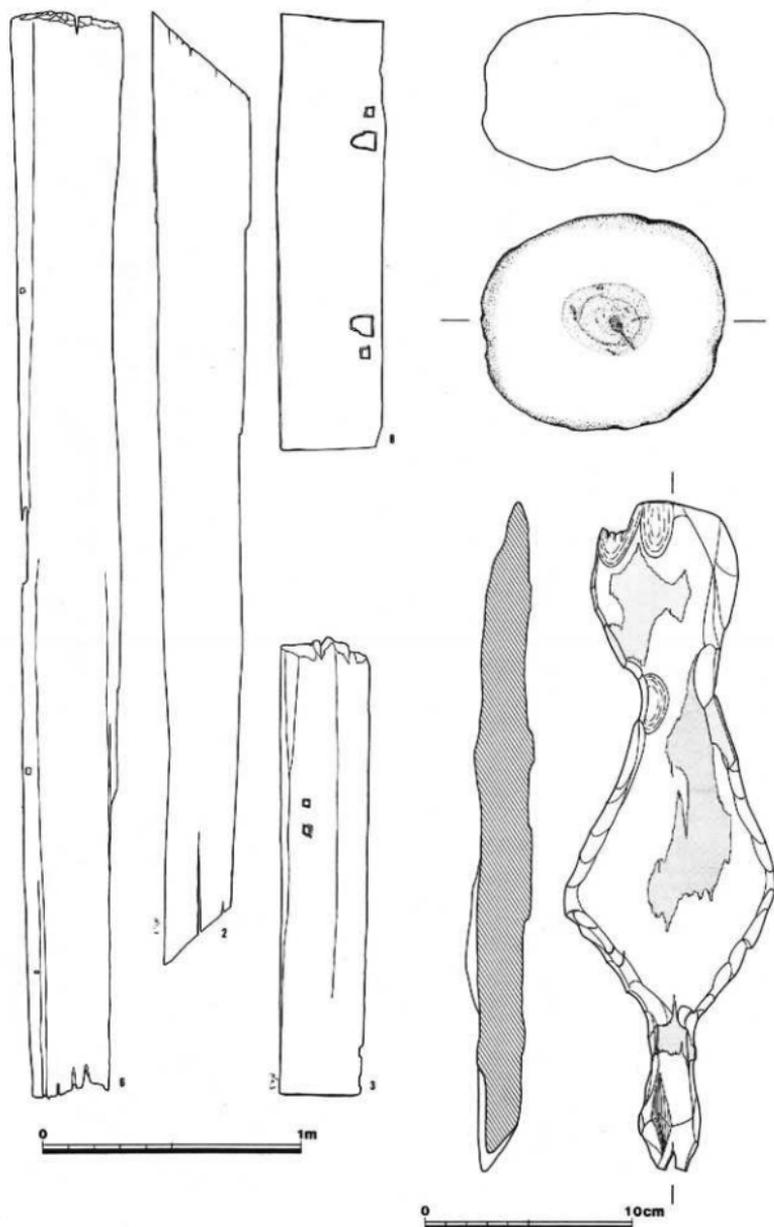
第5図 竹田神社地区 掘立柱建物1



第6图 竹田神社地区 溝1 出土遺物実測図(須惠器)



第7图 竹田神社地区 清1 出土物实测图(土器・须恵器)



第8图 竹田神社地区 溝1 出土遺物実測図(木器・石器)



第 9 图 外広地区1 遺構平面图

## b. 外広地区 (第9～13図、図版六～十二)

竹田神社地区の北方約200m、日野丘陵裾の扇状地状の緩傾斜地に立地する。調査は、ほ場整備工事の切土箇所のうち、試掘によって遺構の存在が半明している4ヶ所で行なった。調査面積は約3000㎡である。主な遺構は古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居8棟と、平安時代後期のピット群である。

### 外広地区1

今回の調査で検出した竪穴住居8棟のうち6棟はこの地区内で検出した。他に多数のピット群を検出したが、建物として完結するものは認められなかった。遺構は黄褐色土の地山を切り込んで明茶褐色か茶褐色の埋土が入り込むものを通有とするが、竪穴住居1・2・4・5は暗茶褐色土層のベースに暗黄褐色の埋土である。

(竪穴住居1) 平面は方形であるが、北東半分を大溝に削平されている。東南部も竪穴住居2と切り合っており、全体規模・カマドの位置は不明である。主軸はやや東に振っており、残存長は南北5.2m、東西4.3m、深さ0.14mを計る。住居内南西隅から約50cm離れた位置で埋土中に若干の炭・焼土を検出したが、カマドとして認められるものではない。埋土中より数点の土師器片を検出したが図化し得なかった。

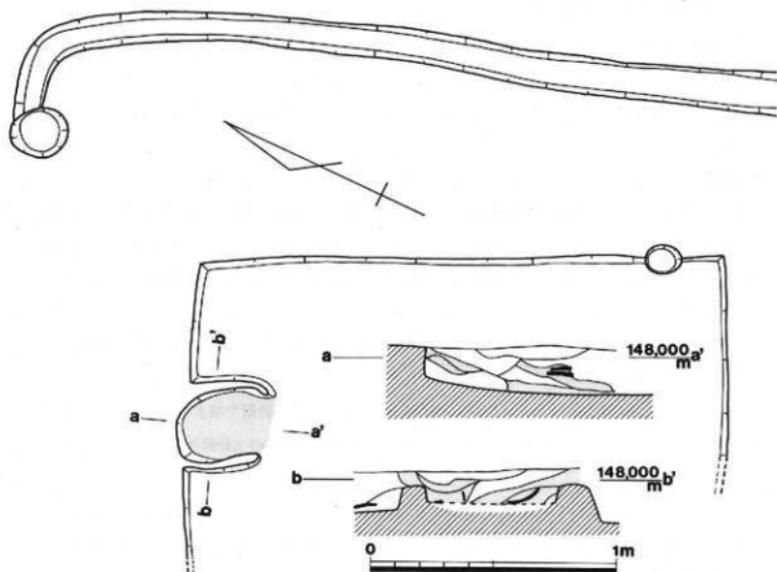
(竪穴住居2) 竪穴住居1に南接しており、1と同様に北東半分を大溝に削平されて、全体規模、カマドの位置は不明である。主軸はほぼ正方位で、残存長は南北5.2m、東西3.9m、深さ0.15mを計る。埋土内より須恵器坏身(第12図71)が出土した。また、住居内北土より須恵器坏蓋(第12図70)が出土しており、いずれも7世紀後半の遺物である。住居床面には14ヶ所のピット、土壇がみられたが、同住居の柱穴と断定できるものはなかった。

(竪穴住居3) 調査地区内では最高所に位置する住居である。西半部は大溝によって削平されている。主軸方位は28°西へ振っている。規模は南北4.35m、東西残存長2.5m、深さ0.21mを計る。北壁中央部にカマドが構築されており、上半部は削平されていたが、下半部はよく残っていた。カマドの規模は幅53cm、長さ72cm、残存高20cmを計る。燃焼部内は炭・焼土とともに土師器壺(第12図73)、須恵器高台付坏身(第12図72)が出土しており、調査区内の竪穴住居では最も新しい8世紀の所産である。本住居の山側(東側)には幅30cm弱の排水溝を設けている。

(竪穴住居4) 南半は竪穴住居5に削平されていて全体規模は不明である。北壁にカマドを設け、北壁から東壁にかけて壁溝とみられる溝がめぐる。規模はカマドの中心部から東壁溝まで2m、カマド北辺から竪穴住居5の北壁までは3mを計る。カマドは後世の削平を受けて床面焼土と炭を残すのみであった。

(竪穴住居5) 北壁と東壁の一部を残す。主軸方位は15°西へ振っている。残存長はカマドの中心から東壁までが2.5m、東壁2.2m、深さ0.18mを計る。カマドは北壁中央部に構築されているが、床面に焼土・炭が残るのみで構造は不明である。カマド周辺には土師器壺(第12図77・78)が数個体分出土した。

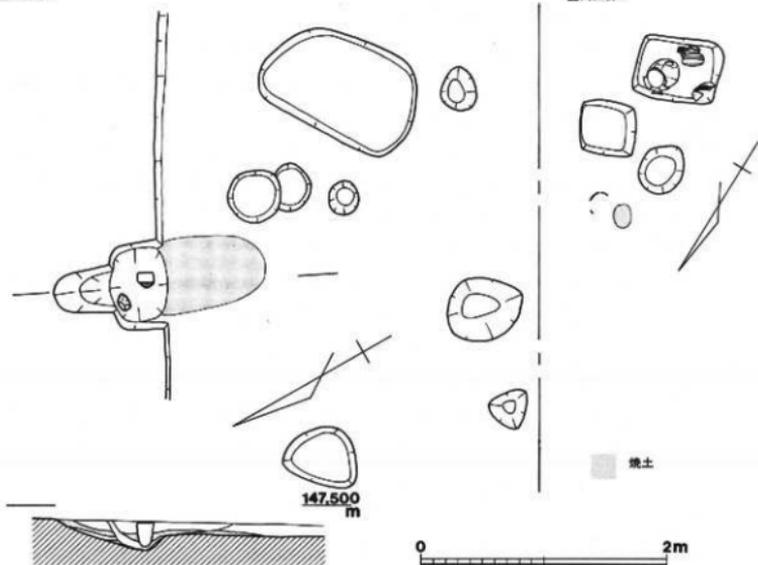
(竪穴住居6) 北壁とカマドのみが遺存しており、全体規模は不明。主軸方位は西へ28°振る。残存長は北壁で3.2m、深さ0.1mを計る。カマドは住居から突出して構築されており、残存長は北壁より煙道端まで90cm、燃焼部は床面より深く掘り下げられており長さ43cm、幅71cm、深さ24cmで、中央に



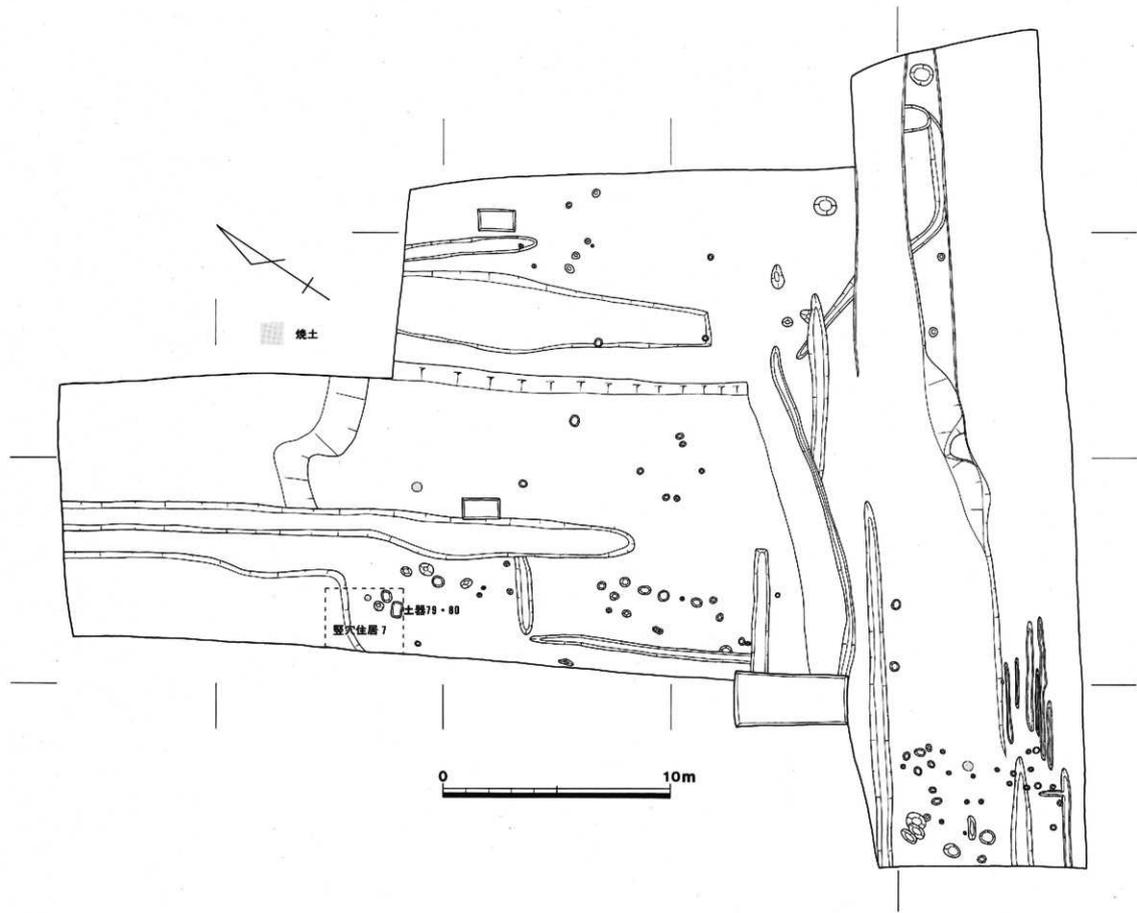
雙穴住居 3

雙穴住居 6

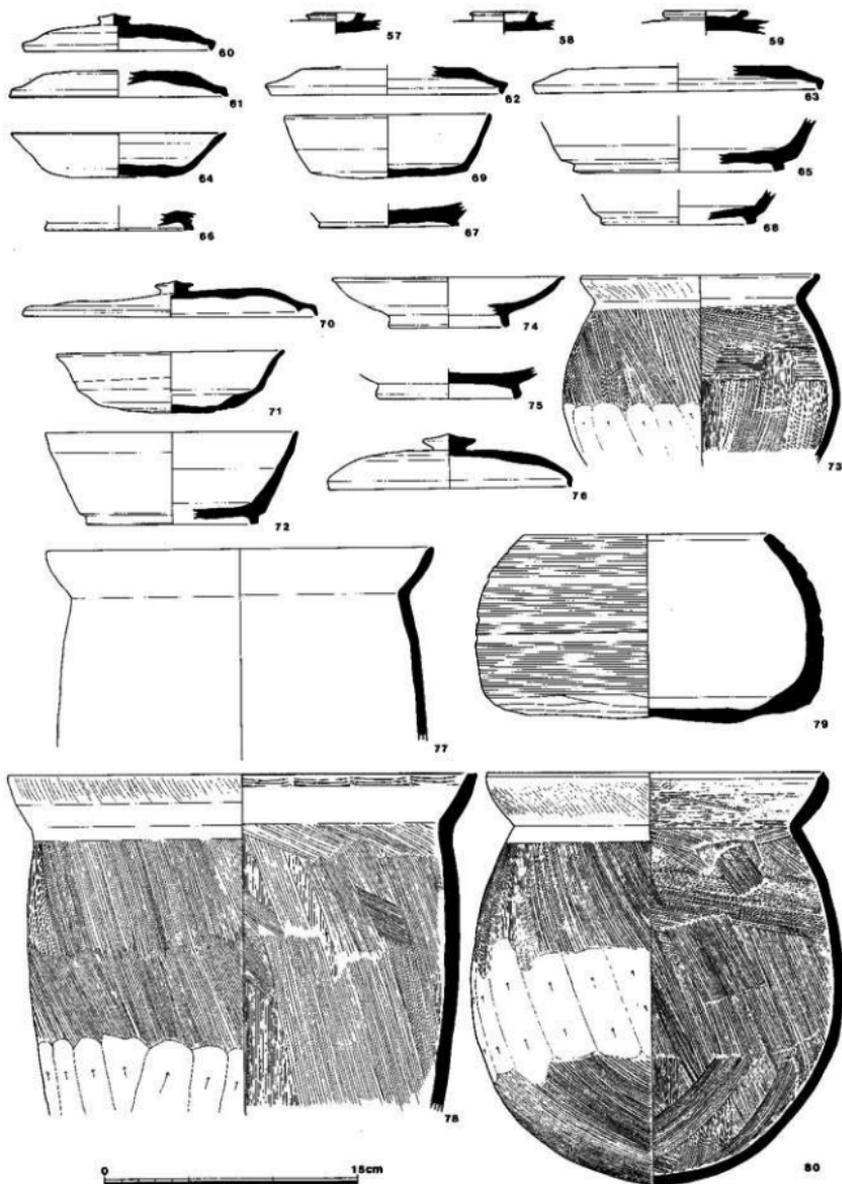
雙穴住居 7



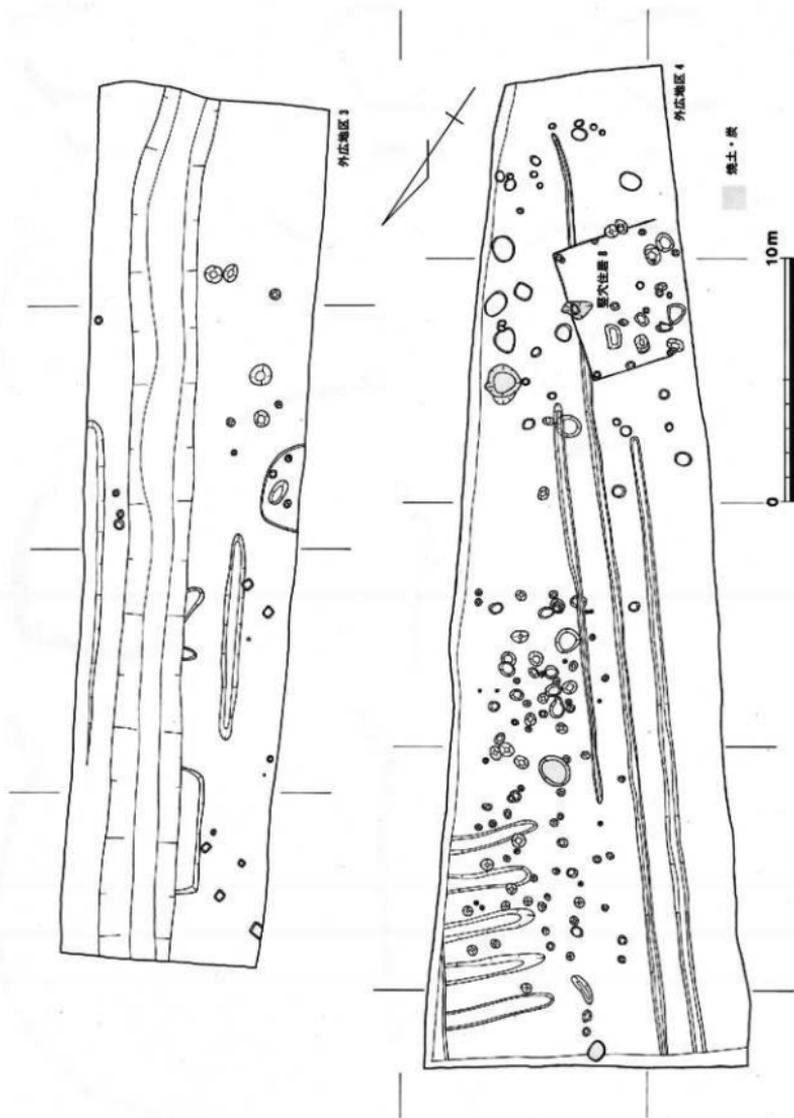
第10圖 外広地区1 雙穴住居3・6 外広地区2 雙穴住居7



第11图 外広地区2 遺構平面图



第12圖 外広遺跡出土遺物実測図(須恵器・土師器)



第13图 外広地区3・4遺構平面图

支脚石が残る。支脚石の上面は床面より10cm高い。煙道は長さ47cm、幅40cmを残している。

(大溝1) 調査区内を地山の傾斜に平行にして掘られた幅6m、深さ1.2mの溝で、中層より中世陶器大甕の体部片が出土した。

#### 外広地区2

調査地区全域にわたり後世の削平、攪乱を受けており、全体に遺構の遺存度は悪い。調査地区内では低い部分において比較的遺構がよく残っていた。遺物量、遺構密度ともに少なく、遺跡の縁辺部と考えられる。主な遺構は竪穴住居1棟、ピット群である。

(竪穴住居7) カマド床面と支脚用の土師器臺、貯蔵穴のみが残存していた。貯蔵穴は方形で、カマドの右に位置する。大きさは52cm×68cm、深さ30cmを計る。異形須恵器(第12図79)、土師器甕(第12図80)が出土した。

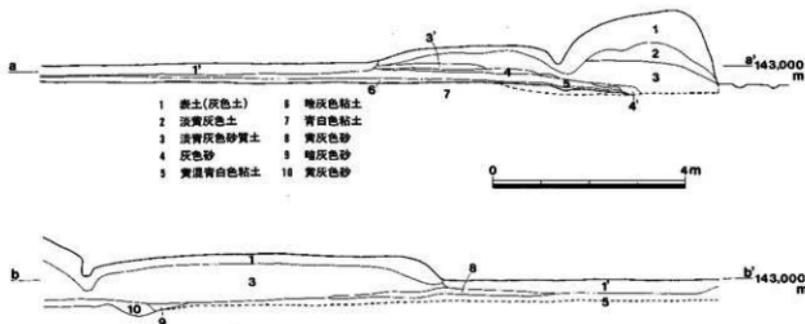
#### 外広地区3

調査地区内を、地山の傾斜に平行して掘られた幅2.7m、深さ0.4mの溝が走る。溝より低位にはピット群がみられるが、建物として完結するものはない。遺構からの遺物は少なく、図化に耐え得るものはなかった。

#### 外広地区4

古墳時代後期の竪穴住居1棟と平安時代後期のピット群を検出した。

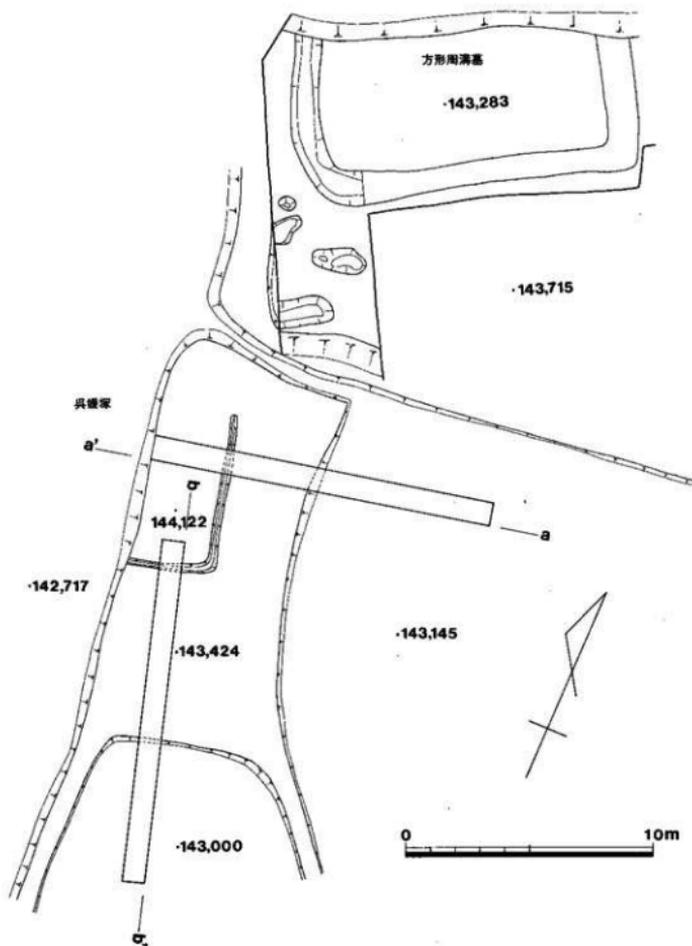
(竪穴住居8) 方形プランで、北壁中央部にカマドを構築する。南壁は後世の削平のため検出できなかった。主軸方位は38°東へ振る。規模は東西5.5m、南北の残存長は4.4m、深さ0.05mを計る。



第15図 呉坂塚 土層断面図

C. 呉媛塚地区 (第14・15図、図版十三・十四)

呉媛塚は長さ15m、幅7m、高さ1mの長方形の土盛りの塚で、従来より半環の円墳として周知されていた。今回の調査では古墳としての規模・埋葬施設の確認のため直交する2本のトレンチを設定した。その結果、埋葬施設・古墳としての盛土・遺物は見られなかった。しかし、「呉媛塚」もしくは



第14図 呉媛塚地区 遺構平面図

「みこし塚」と呼びならわすことから、中世以後の民間信仰の対象とされてきたことはうかがえる。

具媛塚は古墳ではなかったが、周辺部の調査で、一段高くなった北方の水田から1辺11.4mの方形周溝墓を検出した。北半は水田により削平されており、主体部も確認できなかった。周溝の幅は1m前後、深さ0.4mであった。周溝のうち、排水路予定地内のみを掘り込み、少量の弥生時代後期と思われる土器片を検出した。

## (2) 遺物 (第6～8・12図、図版十五～二十二)

今回の調査で出土した遺物は土器(弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器)、石器、木器である。木器には竹田神社地区溝1から出土した土留板9枚と杭がある。

### 土器

(竹田神社地区溝1) 溝1内からは6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器・土師器が出土した。

#### <須恵器>

坏蓋：天井部外面をヘラケズリするA類(1～3・6)と未調整のB類(4・5・7～10)に分けられる。口径は相対的にB類が小型化しており、12.3cm前後となる。A類は15.6cmから11.7cmまでと幅がある。他に、有蓋高坏の蓋と考えられるもの(33)と、口縁部内面にかえりがつき、宝珠つまみを有するもの(34・35)がある。時期はA類がTK209、B類がTK217に類似する。

坏身：たちあがりか内傾して直立し、底部外面をヘラケズリするA類(11・12・14・16・23・24・26・31)と、たちあがり退化し、底部外面はヘラ切り未調整のB類(13・15・17～22・25・27～30)とに分かれる。坏蓋同様にA類からB類へと小型化の傾向にある。

壺(39・40)：口頸部がラッパ状に広がり、縷を有する部分で段をもつ。

有蓋高坏：長脚2段スカシでスカシは3方向である。

短頸壺：口頸部は外反気味に短くのびる。

口頸部が外傾し、肩部が張るもの(36)と、口頸部が外反気味に直立するもの(37)がある。

すり鉢(41)：外傾する体部と厚い円板の底部からなる。底部外面にはヘラ状工具で刺突するが、貫通するものはない。

甕：すべて中形甕であるが、口縁部の形態はすべて異なる。(51)は口縁部に断面三角形の突帯をめぐらせて、端部は面をなす。(52)は口縁部が外反し、端部は外面へ肥大して鋭気味に丸く終わる。

(53)は口縁部は「く」の字に外反して端部は外面へ肥大し、上端に面をもつ。(54)は(53)に似るが、外傾度は少なく上端は凹んだ面をなす。(55)は端部が内側へ屈曲して丸く終わる。

#### <土師器>

甕(42)は口径40cmの大型甕で、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部から体部にかけての屈曲部内面はヨコ方向のヘラケズリ、他はヨコナデ。口縁端部は上方へつまみあげ鋭く終わる。

(43)は口径18.6cmの中形甕で、体部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケを施す。口縁端部はわずかに肥大して丸く終わる。(44)は口径19.6cmの中形甕で、口縁部は短く外反し、端部は外下方へ小さく折れて鋭く終わる。体部外面は斜めハケとヨコハケ、内面はヘラケズリ、口縁部外面はナデ、内

面はヨコハケを施す。(46・47)は口径20.8cmと21.6cmの中形甕で、口縁端部は上方へつまみあげて外端は面をなす。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。(48)は、口径22.4cmの中形甕で、口縁部は外上方へ真直に延び、端部は外傾気味の面をなす。体部外面はタテハケ、口縁部外面はナデ、内面はヨコハケを施す。(49)は口径25.2cmの中形甕で、口縁部は外上方へ大きく延び、端部は肥大気味に丸く終わる。器壁は比較的薄い。体部外面はタテハケ、内面は正目板状の工具で削る。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。(50)は口径28.4cmの大形甕で、口縁部は外反する。端部はわずかにつまみあげ、外端部は面をなす。外面はタテハケを施して、口縁部と体部の境に一条のナデを施す。

長頸壺：口径9.6cm、器高約21cm、頸部長10.5cmを計る。精良な胎土を用いている。底部外面はヘラケズリを施し、他は丁寧にナデを施す。

(竹田神社地区包含層) 掘立柱建物群の存続時期を示す一群である。8世紀中葉から9世紀中葉までの時期が与えられよう。図化し得たのは須恵器のみで、土師器は量的にも少なく図化できるものもなかった。

#### <須恵器>

坏蓋：宝珠つまみ(60・61)と環状つまみ(57~59)がある。口縁端部の形態から、内方へ垂下する(62)が8世紀中葉にまで遡る。(61)は口縁端部が外方へ短く垂下することから9世紀に下ると考えられる。環状つまみは径3.6cmから5cmで、端部を外方へつまみだす。

坏身：平底(64・69)と高台付(65~68)がある。8世紀代の(65・68・69)と9世紀代の(64・67)に分けられる。

(外広地区出土土器)

(70) 竪穴住居2の土坑内より出土した須恵器坏蓋で、口縁部内面にかえりをもつ。(71)とともに7世紀後半を示す。

(71) 竪穴住居2の南壁に接した埋土中より出土した須恵器坏身で、底部外面が丸味を帯びることから(70)と同時期と考えられる。

(72) 竪穴住居3のカマド内から出土した須恵器高台付坏である。(73)が共伴する。

(73) 土師器甕で、体部外面上半はタテハケ、下半はヘラケズリ、内面は下半をタテハケ、上半をヨコハケ、口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。口縁端部は内側に巻き込み気味に肥大する。(72)とともに8世紀後半を示す。

(74・75)と排水路掘削中に出土した灰釉陶器で、(74)は皿、(75)は椀となる。黒征90号窯式併行と考えられる。

(76) 排水路掘削中に出土した須恵器坏蓋で、8世紀前半を示す。

(77) 竪穴住居5のカマド周辺より出土した土師器長胴甕である。口縁部は内湾気味に外反し、端部は鋭り気味に終わる。調整は不明。(78)が共伴する。

(78) 土師器長胴甕である。口縁部は内湾気味に外傾し、端部は凹んだ面をなす。体部外面上半はタテハケ、下半はヘラケズリ、内面はタテハケ、口縁部は内面の上端近くにヨコハケ、他はヨコナデを施す。(77)とともに7世紀後半を示す。

(79) 竪穴住居7の貯蔵穴と考えられる土坑から出土した異形須恵器で、堤瓶の胴部のみを製品と

して使用したものとと思われる。体部外面はカキ目を施し、5条の凹線が不規則な間隔で廻る。底部外面は静止ヘラケズリ、内面はナデを施す。口径14.8cm、器高11.3cm、体部最大径20.6cmを計る。(80)が共伴する。

(80)土師器壺で、やや長胴気味の胴部に内窩して外傾する口縁部がつく。口縁端部は上方につまみ出す。体部外面中位にヘラケズリを施し、他はタテハケを施す。口縁部外面はハケ後ヨコナデ、内面はヨコハケを施す。口縁部内面にはヘラによる4.6cmの沈線が描かれている。

#### 木器

竹田神社地区の溝1から土留用の板材9枚と杭14本、用途不明の木製品1点が出土した。板材は長さ169.4cm～420cmと規格性はなく、形状も様々で、柄穴や両端を斜めに加工したものがあることから、建築材等を転用したものと考えられる。

- 1：長さ184.8cm、幅21cm、厚さ4.6cm。片端は破損する。
- 2：長さ369.8cm、幅37cm、厚さ1.8cm。両端は斜めに加工。長辺の端近くに幅7cm、深さ0.8cmの切り込みがある。
- 3：長さ178cm、幅34cm、厚さ3.2cm。中央寄りに1辺3cm前後の方形孔2個を穿っている。また、片端近くに2と同様の切り込みが連結して2ヶ所ある。
- 4：長さ377cm、幅32.8cm、厚さ3.2cm。表面に焼痕を残す。2と同様の切り込みがある。
- 5：長さ281.2cm、幅32cm、厚さ1.4cm。2と同様に両端を斜めに加工し、短辺中央に切り込みがある。
- 6：長さ420cm、幅38cm、厚さ1.4cm。板材群の中では最も長い。片辺に約80～100cm間隔で4ヶ所の孔を穿っている。
- 7：長さ223.4cm、幅24.8cm、厚さ4.6cm。片端は破損する。
- 8：長さ169.4cm、幅41cm、厚さ5.6cm。片辺に大小2孔が一對となって、2ヶ所に穿孔する。大孔は半円型で長径8cm前後、小孔は方形で一辺3.5cm前後である。
- 9：長さ229.4cm、幅26cm、厚さ4.6cm。用途不明木製品：長さ32.4cm、最大幅10.2cm、厚さ2cmの木製品で、楕円形の部分を頭部とする形代を想定することも可能である。6世紀後半～7世紀前半の所産と考えられる。

#### 石器

竹田神社地区溝1内より、凹石一点を出土した。長径11.4cm、短径10.2cm、高さ7.5cmの楕円形で、側面は指先がおさまる程の凹みがみられる。

#### 4. まとめ

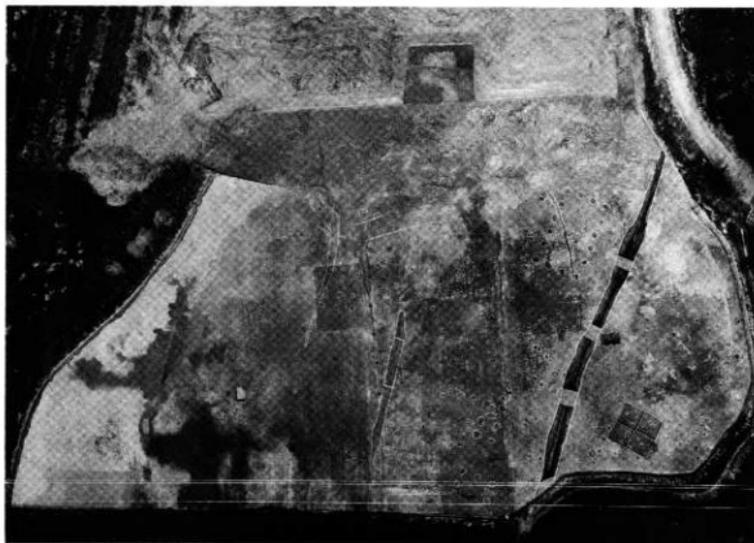
今回の調査で外広遺跡が弥生時代後期から平安時代にかけての集落であることが判明した。地区別にみると、竹田神社地区では古墳時代後期の竪穴住居1棟(1)、南北溝1条(1)、奈良時代の掘立柱建物5棟(1・3・4・5・6)、溝1条(5)、他に時期不明の掘立柱建物1棟(2)、溝3条(2・3・4)を検出した。外広地区では竪穴住居8棟のうち6世紀代2棟(7・8)、7世紀代4棟(1・2・4・5)、8世紀代1棟(3)、6～7世紀代1棟(6)を検出した。他に平安時代後期のピット群を検出している。呉緩塚地区では弥生時代後期の方形周溝墓一基を検出した。以上が主要な遺構である。時期別に見てみると古墳時代後期(6世紀後半)から奈良時代にかけての遺構が顕著であり、当該地区の集落変遷の両期を6世紀後半に見出し、その発展を7～8世紀に求めて大過ないと考える。とくに、竹田神社地区溝1のような灌漑用、もしくは排水用の大溝を掘削していることは、この地区の大規模な開発が行われた時期を示していると言えよう。また、竪穴住居群は溝1よりも丘陵側の高所に立地しており、溝1は農業用水路であるとともに、居住区と水田区を区画するために穿たれたものと考えられる。この時期の居住形態は竹田神社地区竪穴住居1や外広地区竪穴住居7・8にみられるように、竪穴住居が通有であった。竪穴住居は一辺5m前後の方形プランで、北壁もしくは東壁に造り付けカマドがある。なお、竹田神社地区掘立柱建物2は他の掘立柱建物群と方位を異にしており、古墳時代にまで遡る可能性をもつ。つづく7世紀後半においても外広地区竪穴住居1・2・4・5のような竪穴住居群がみられる。8世紀代においても、外広地区竪穴住居3があり、奈良時代まで竪穴住居は存在することが判明した。一方、竹田神社地区掘立柱建物群にみられるように、正方位を意識した掘立柱建物群が併存している。このことは、景観的には一つの村落のなかに、掘立柱建物群に居住する集団と、竪穴住居群に居住する集団があり、それぞれが村落内の階層差を示していると考えられる。当然掘立柱建物群が、その規模、立地において竪穴住居群よりも優位であり、南接する宮の前遺跡の和銅開珎100枚の出土をも傍証とするならば、律令制下の郷長クラスの小首長の居住を考えた方がいいのではなからうか。さらには、日野町大谷古窯(8世紀後半)出土須恵器に特徴的な環状つまみが、竹田神社地区掘立柱建物群付近から出土していることや、岡本窯(7世紀後半)にも近接しており、同時期の遺物も出土していることから、律令国家形成期以後、須恵器製作集団との関連をも推定できる。

平安時代以後は外広地区において掘立柱建物を検出しており、12世紀までは居住区としてあり、それ以後に水田化したと考えられる。竹田神社地区は平安時代前期までは居住区であったが、それ以後、水田化したものと考えられる。

以上、概観してきたように外広遺跡は弥生時代以降、継続的に居住地として存続しており、その廃絶は12世紀と考えられる。廃絶の原因の一つには、13世紀以降、全国的にみられる集村化が考えられよう。

今回の調査の成果として、湖東地区内陸部における古墳時代後期から律令制国家成立期の集落変遷を考えるうえで貴重な資料を得ることができた。日野川流域の地域史を再構成するために、今後とも検討を続ける必要があることを記してまとめにかえたい。

圖 版



竹田神社地区 全景



竹田神社地区 溝1(南より)



竹田神社地区 溝1 断面(b-b')



竹田神社地区 溝1 溝底土質断面(配-4c)

図版三 外広遺跡



(G) 田原市史跡調査委員会 第一 田原市史跡調査委員会 (G)



田原市史跡調査委員会 第一 田原市史跡調査委員会 (G)



竹田神社地区 掘立柱建物1 (南東より)



竹田神社地区 掘立柱建物1 柱根遺存状況(pit 1)



竹田神社地区 掘立柱建物 2 (北より)



竹田神社地区 掘立柱建物 4・竪穴住居 1 (北より)



外広地区1 全景(西より)



外広地区1 竪穴住居1・2・4・5(北より)

図版七 外広遺跡



外広地区1 竪穴住居②(正対)



外広地区1 竪穴住居3 カマド内土層堆積状況



外広地区1 竪穴住居4・5(南より)



外広地区1 竪穴住居 カマド周辺(南より)



外広地区1 整穴住居6 カマド(北より)



外広地区1 全景(南より)



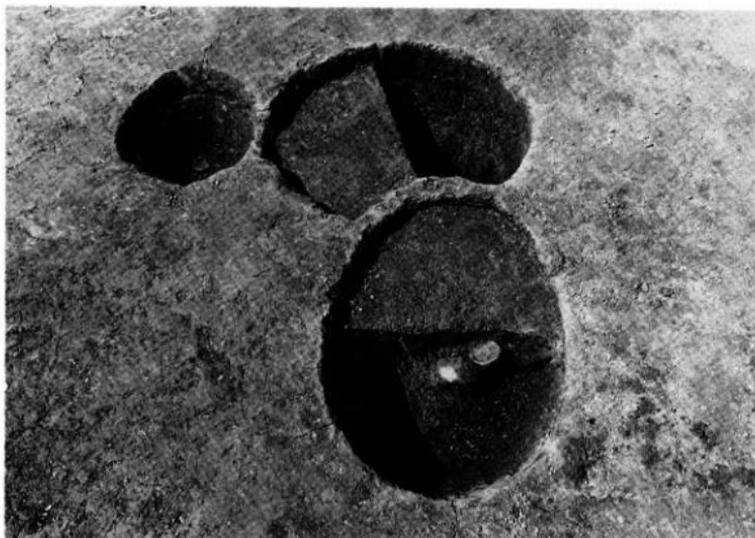
外広地区2 全景(南より)



外広地区2 竪穴住居7(南より)



外広地区4 刺蟻(共42)



外広地区4 柱穴内遺物出土状況



外広地区4 竪穴住居⑧(西より)



外広地区4 竪穴住居⑧ カマド内土層堆積状況(南より)



呉媛塚 遠景(南より)



呉媛塚 土層堆積状況(a-a')



兵衛塚地区 方形周溝墓(南より)



兵衛塚地区 方形周溝墓 全景(北より)

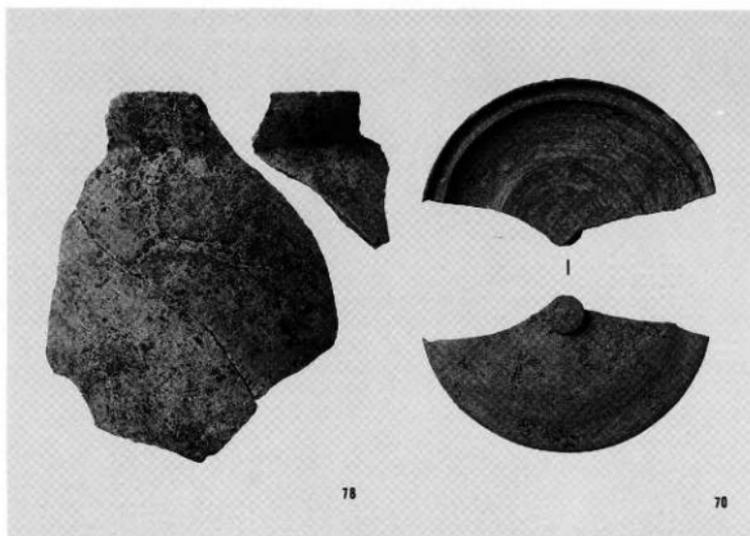


5・11・13・16・20・12・45；竹田神社地区 溝1 出土遺物(須恵器・土師器)

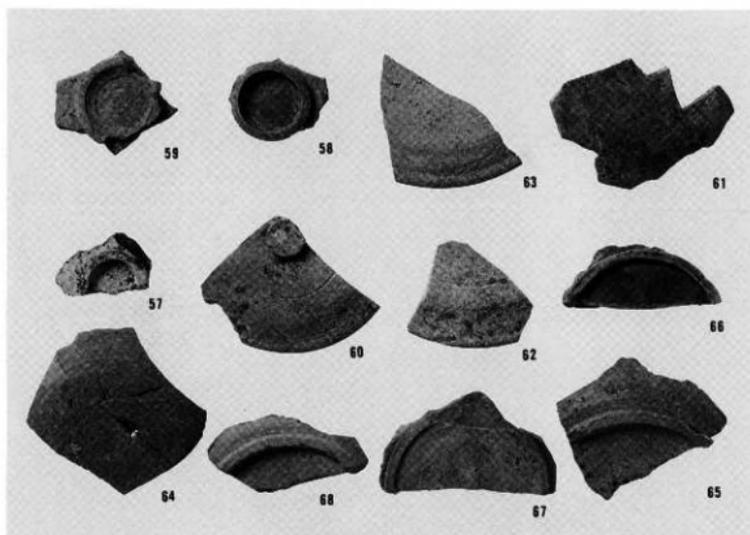
69；竹田神社地区 溝5 出土遺物(須恵器)

79・80；外広地区2 竪穴住居7 土城出土遺物(須恵器・土師器)

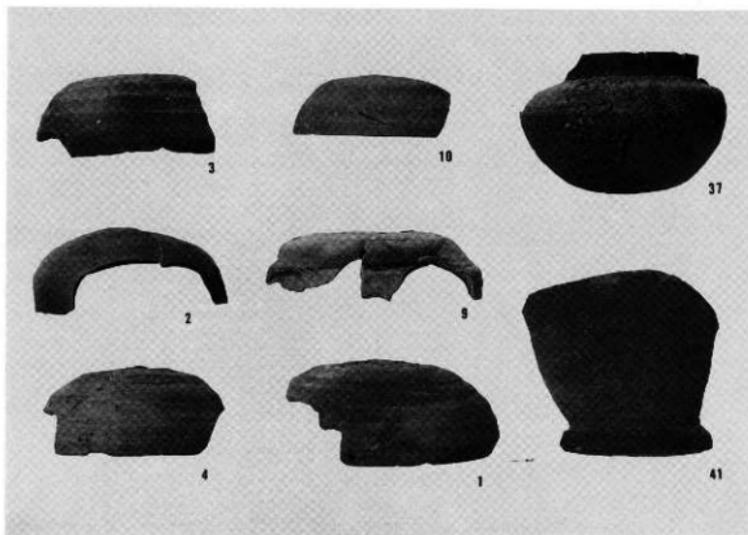
71；外広地区1 竪穴住居2 内出土遺物(須恵器)



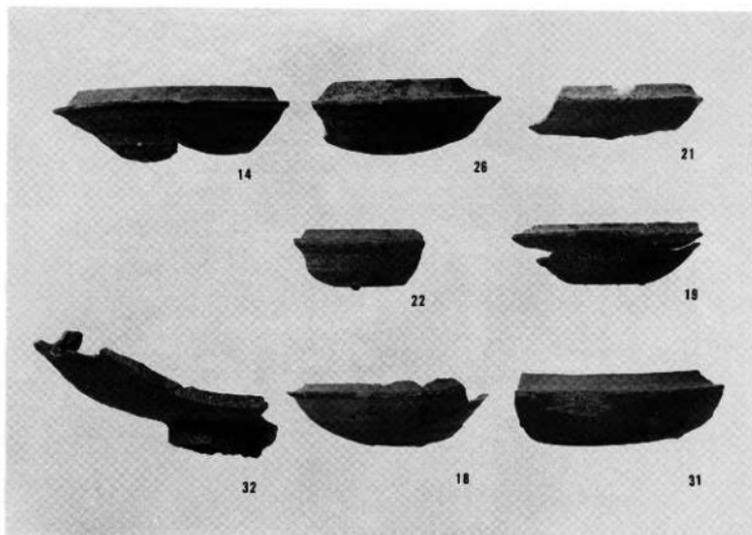
外広地区1 竪穴住居内出土遺物(土師器・須恵器)

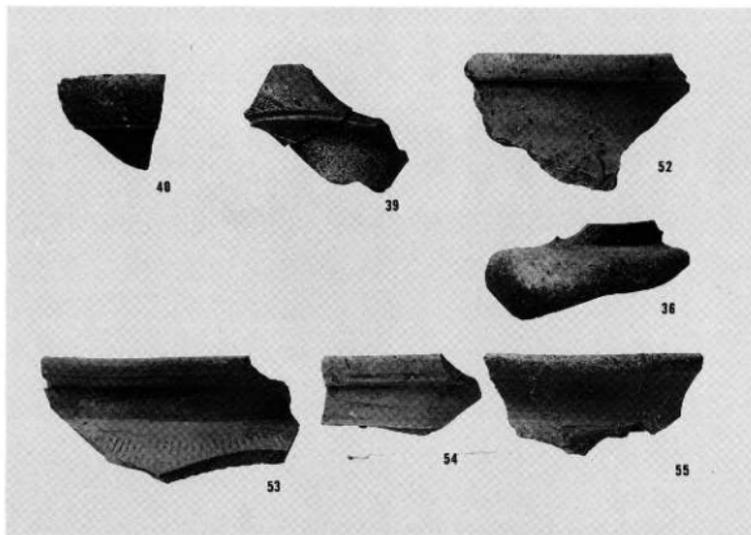


竹田神社地区 出土遺物(須恵器)

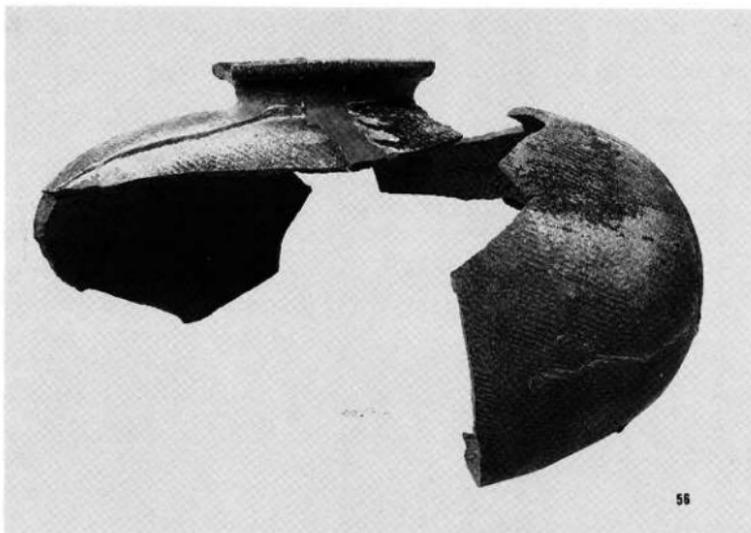


竹田神社地区 溝1内 出土遺物(須恵器)

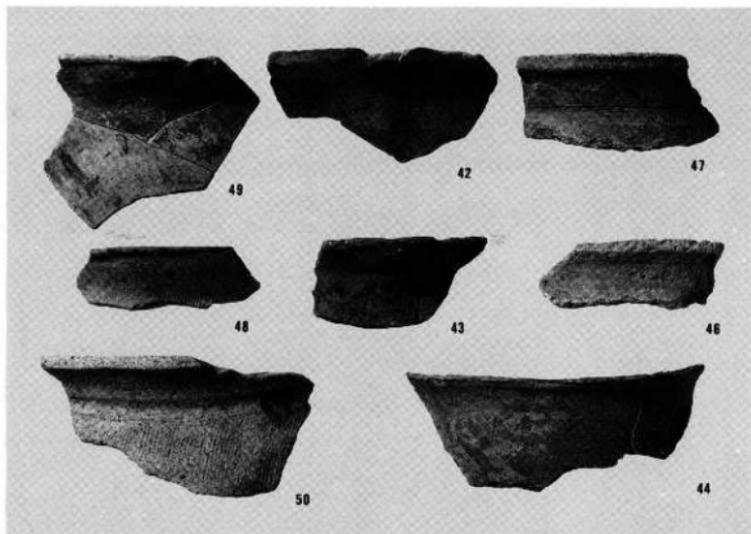




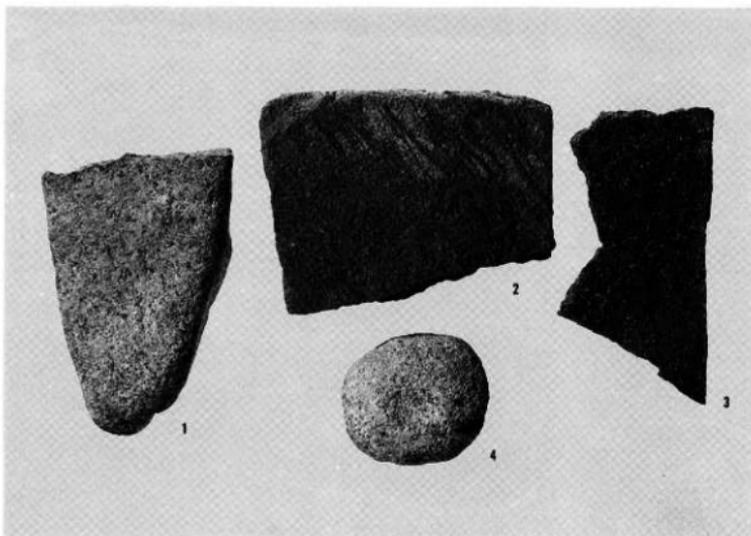
竹田神社地区 溝1内 出土遺物(須恵器)



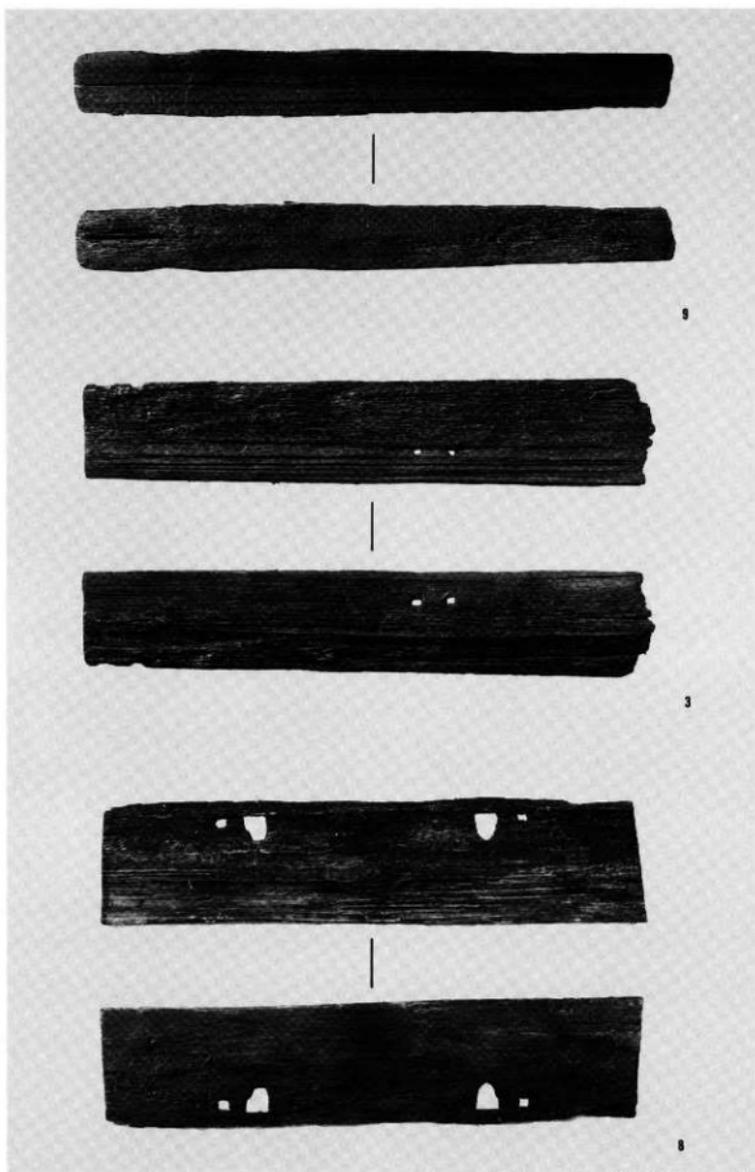
竹田神社地区 溝1内 出土遺物(須恵器)



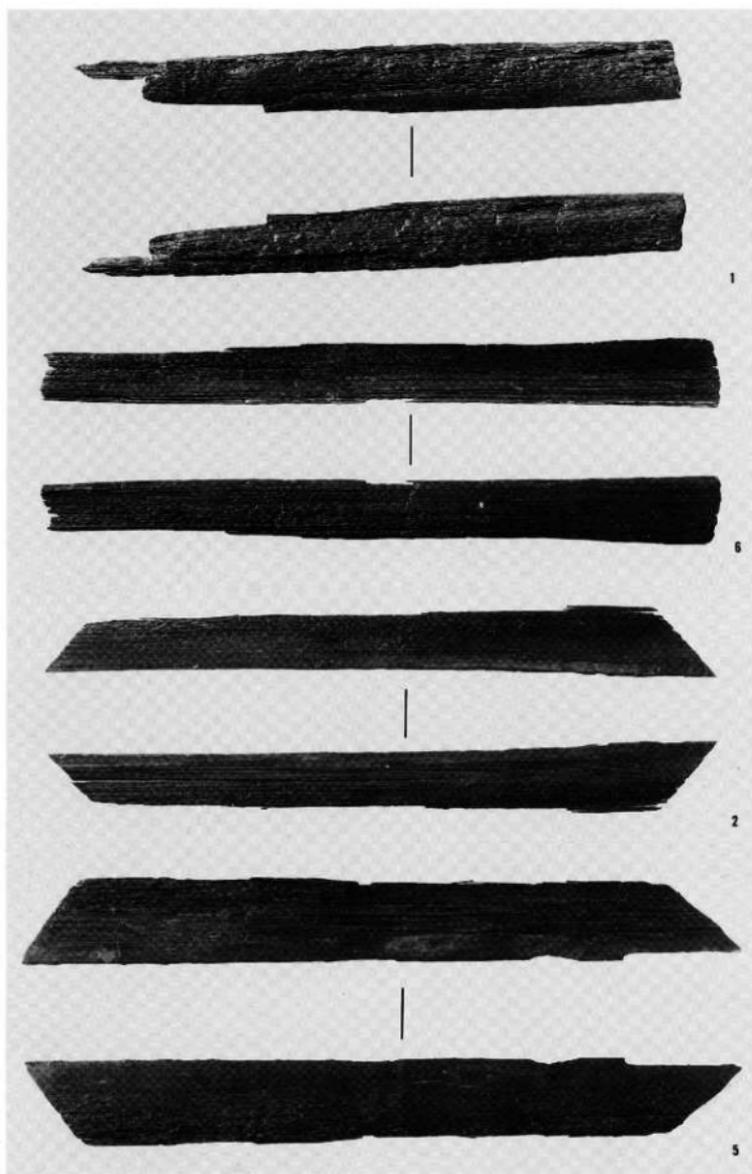
竹田神社地区 構1内 出土遺物(土師器)



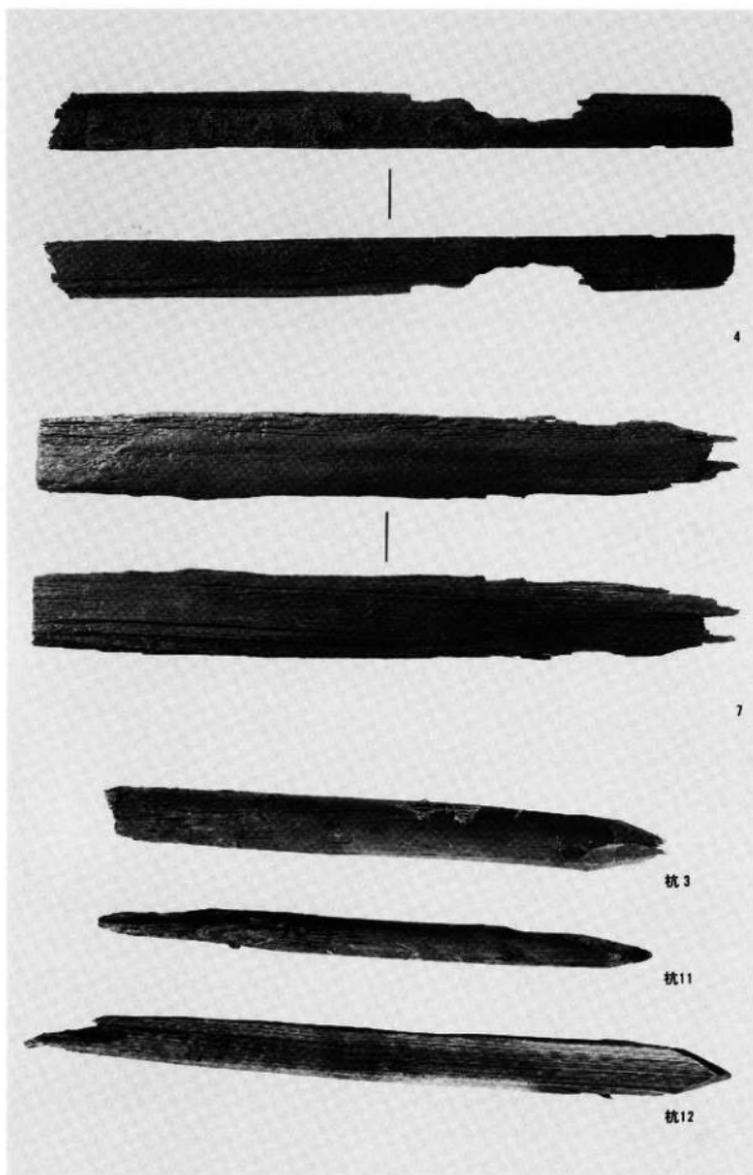
外広遺跡 出土遺物(石製品)



竹田神社地区 溝1 出土板材(9・3・8)



竹田神社地区 溝1 出土板材(1・6・2・5)



竹田神社地区 溝1 出土板材(4・7)・杭3・杭11・杭12

### III. 蒲生郡日野町田寺・下森遺跡

## 1. はじめに

本報告は、昭和60年度日野川東部必佐地区小谷・増田工区の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果であり、田寺・下森遺跡がその対象となった。

当遺跡は蒲生郡日野町小谷・増田地先に所在し、日野川によって形成された河岸段丘上に立地する。主要地方道近江八幡日野線と日野川にはさまれた水田地域で、田寺・下森という小字名を残し、日野町教育委員会の実施した分布調査により弥生時代～鎌倉時代に相当する遺物が広範囲にわたって採集されている。

当遺跡の周辺は小御門丘陵から日野川の支流である出雲川流域にかけて古墳時代を中心とした遺跡群が分布する。縄文土器の出土が知られ、弥生時代～古墳時代の方形周溝墓・竪穴住居跡の確認されている内池遺跡<sup>(1)</sup>、古墳時代後期の小御門古墳群<sup>(2)</sup>がある。平安時代以降は、平安時代末から室町時代にわたる大規模墓地で多数の蔵骨器が出土した大谷古墓<sup>(3)</sup>、鎌倉時代の火葬墓の確認されている小御門C遺跡<sup>(4)</sup>が同一丘陵上に立地する。また、蒲生町との町境には100枚の和同開珎の出土で知られる宮ノ前遺跡が位置し、今年度の調査では古墳時代の土器・木製品が旧河道より多量に検出されている。

このように本遺跡は各時代の遺跡に隣接した中にあるが、これまで遺跡の性格・時期等が詳細には知られていない。

なお、調査は試掘調査を昭和60年4月25日～5月9日、本調査を昭和60年8月30日～12月14日に実施し、調査にあたっては日野川東部土地改良二課、日野町教育委員会、地元増田・小谷の方々の御協力を得、種々御配慮いただいた。

また、発掘調査、整理作業にあたっては西川良浩、田中恵二（滋賀大学）、古沢寛治（神戸学院大学）、山本美和、鈴木香織、垣見貴子（京都女子大学）、大久保順子、遠見きよみの諸氏の御協力を得た。記して厚くお礼申し上げたい。

なお、現地調査及び本文の執筆・編集は吉田秀則、森 格也が行ない分担は文末に明記した。

(吉田)

## 2. 調査の方法と結果

今年度の調査は対象面積が約12haであり、まず、排水路部分の他に切土部分で試掘調査を実施し、遺構・遺物によって調査面積を最小限におさえる方針をとった。

ここではその調査方法とその結果について試掘調査、排水路部分、試掘調査によって限定された切土部分A・B区（約5,800m<sup>2</sup>）に分けて概要を述べることにする。



第1図 トレンチ配置図及び切土部分調査区

## (1) 試掘調査 (第1・2図)

本遺跡は分布調査などで弥生時代から鎌倉時代の遺物の散布地として知られていたが、詳しい内容は不明であった。そこで本調査の事前に遺跡の範囲、性格等を知るために、用地内120,000㎡の内の切土部分、排水路部分を対象に試掘調査を行った。トレンチは2m×4mを基本に、切土部分の水田の任意の場所に設定した。また排水路部分では基本的に25m間隔にトレンチを設定した。各トレンチの位置は第1図に示した通りである。

試掘の結果、トレンチ2～4、6、8～12、15～17、27、29、30、33、34、36～41、43、45～49、61～66、74の合計36ヶ所のトレンチにおいて遺構が確認された。遺構としては、ピット、溝、土壇、竪穴住居跡などが検出された。なお、合計81ヶ所のトレンチの土層柱状図ならびに遺構検出面のレベルは、第2図に示した通りである。以下、試掘調査の結果の概要を述べて行く。

調査区の北西から南西にかけて日野川の自然堤防が形成されており、その内側は現地表面が海拔145m前後となっていて、外側に比べて約2mほど低くなっている。この部分は試掘の結果、トレンチ18～26、53～57で見られるように耕土直下で鉄分の混じった砂礫土となり、かつてこの場所も日野川の流路部分であったことが分った。遺構は全く検出されなかった。

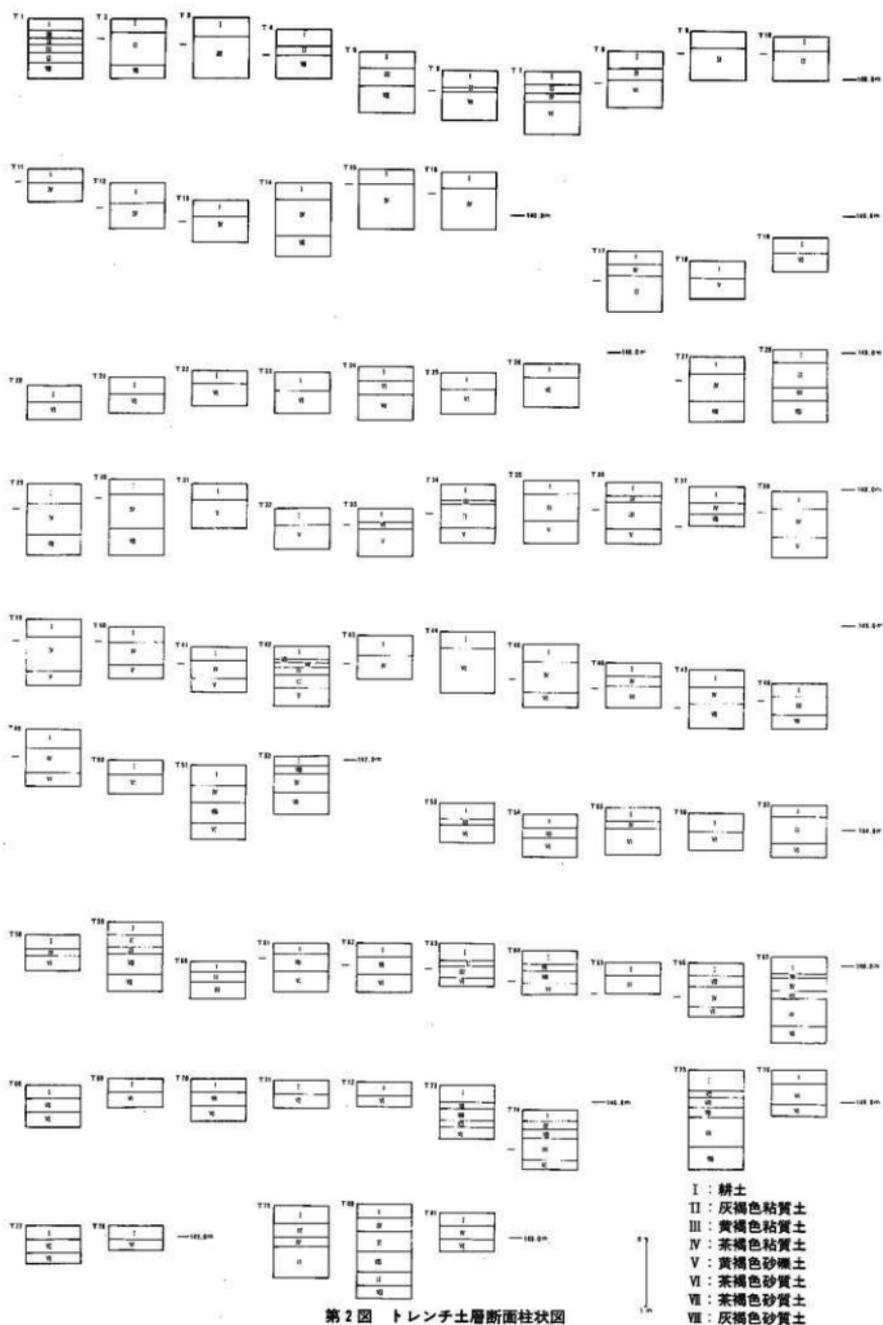
またこの自然堤防の外側の地区でもトレンチ31、32、44、50、68～71などで耕土直下から鉄分を含んだ粗い砂礫土となるため、調査区の北側部分から南東側にかけて流路があったものと思われる。この流路と思われるラインをはさんで両側で遺構の確認されたトレンチが多いことから、この流路を中心として集落が営まれていたのではないかと推測される。

この流路より南西側では、遺構は耕土下部(耕土は20～25cm)より5～15cm下の灰褐色粘質土面から検出されることが多い。海拔147.6m前後である。遺構はピット、溝、竪穴住居跡の一部がトレンチにおいて検出された。また遺物もトレンチ2、4、12、15で古墳時代後期の須恵器が出土した。さらに遺構こそ検出されなかったが、トレンチ14では須恵器が、トレンチ42、52では古墳時代中期から後期にかけての土師器(甕、高坏)が出土した。このことからこの部分には、古墳時代後期の集落があるものと予想された。

この流路の東側部分(トレンチ33、34、45～47)では耕土層の下部より5～30cm下の灰褐色粘質土面において、竪穴住居跡の一部、溝、ピット等が検出された。海拔147.0～147.5mのレベルである。遺物は土師器の細片が少量出土したのみで、明確に時期決定の出来るものはなかった。

さらに調査区の北部では(トレンチ61～66)耕土層の下部より5～15cmぐらい下のところで、多数のピットと溝、土壇が検出された。出土土器は細片ばかりで時期の分かるものはなかった。トレンチ62では耕土直下より鉄器が出土したが器種不明であり、遺構との関係も不明である。この場所は、他の場所より遺構の密度が高いものと思われる。この部分も流路と思われる所(トレンチ67～72)の際に集落が営まれていたと考えられる。

以上、合計81ヶ所のトレンチによると、遺構は大きく調査区の北部と南部に集中していることから、2つの集落があったものと思われる。日野川の自然堤防内では耕土直下に流路跡があることから集落は営まれず、自然堤防の外側に、つまり日野川を見渡せる場所に小さな流路を囲むように集落が営まれていたと考えられる。そして遺構は概して耕土や床土の次の灰褐色粘質土層中より検出されるこ



第2図 トレンチ土層断面柱状図

とが多かった。この層は粘質土とは言え、砂質の多い層であった。時代は古墳時代後期のものが確認されたが、トレンチ74で平安時代の灰釉陶器碗が出土したなど時代の下るものも確認されたが、遺構との関係やその広がり是不明である。

遺構の大まかな広がりや性格、遺構面の深さなど試掘調査によって得た結果をもとに、日野川東部土地改良事業所と協議を行なったところ、本調査はトレンチ10～14の部分の水田5,800㎡を対象に行なわれることとなり、他の部分は盛土によって保存されることになった。

(森)

## (2)本調査

### 排水路部分

試掘調査の結果、切土部分以外に第36号小排水路(TⅠ～Ⅲ)と第37号小排水路(TⅣ～Ⅵ)を全面調査することになった。

TⅠ～Ⅲの基本層位は耕土、灰褐色土、淡黄褐色土、淡灰褐色砂、淡灰褐色粘質土であり、淡黄褐色土面でピット、溝状遺構を確認したのみで遺物の出土は認められなかった。

また、TⅣ～Ⅵについても基本層位は同様であり、遺構は認められず、土器の小破片が数点検出されたのみであった。

以上の結果、遺跡の北側への広がりは希薄であると言える。

### A区(第1図)

#### 層位と遺構

今回の対象区内の南西部端にあたる約5,800㎡が最終的な本調査区になった。この部分は日野川によって形成された河岸段丘のつき出した先端部で西側の水田面とは約2mの段差をもち、事業計画によると約1.5～2.0mの切土が予定されている部分にあたる。

調査はバックホーにより耕土除去を行ない、遺構面を確認した時点より人手による遺構検出作業に入ったが、約5,800㎡のうち南半部の約3000㎡においてのみ遺構が確認され、残りの約2800㎡についてはすでに削平をうけているらしく、遺構の密度の低いことがわかった。そこで南半部をA区、残りの部分をB区として述べていく。

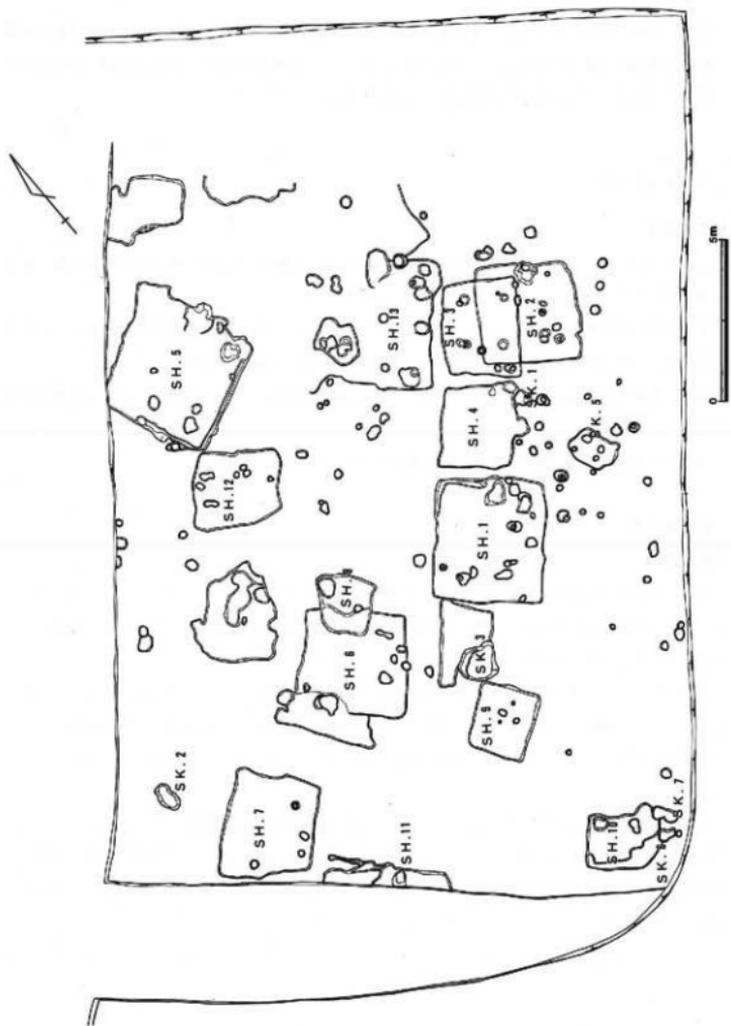
A区では耕土下約40～50cmで黄褐色土の遺構面を確認したが、鉄分の沈着(深さ10cm余り)により全体の土色が茶褐色系に染まり、土層区分を困難にした。やむを得ず若干、深く掘り下げて遺構検出を実施したところ、竪穴住居跡15棟、土壇7基を確認し、比較的少量の須恵器・土師器及び黑色土器・石製品を検出した。

なお、この黄褐色土はさらに20～30cm下に続き、さらに下層でこぶし大の石が混じったレキ層にいたる。

### 竪穴住居跡(第4図～第8図)

#### SH1(第4図(1))

南北6.5m、東西7.8mをはかる平面方形のプランを呈する。東壁ほぼ中央にカマドを有し、全体に



第3图 A区出土器物图

焼土・スミが混入している。カマドの南のだ円形の土境内（SK1）からは表面が著しく磨耗したすり石が3点（第14図6～8）出土し、さらに南の土壌（SK2）からは土師器の甕2点（第6図8・13）、砥石2点（第14図4・5）が検出された。どちらも比較的浅い土壌であるが、貯蔵穴的な機能を果たしたものか予想される。

また、北コーナーでのみ逆L字状の深さ20cmの壁溝が確認されているが、明確な主柱穴は確認できなかった。

#### SH2（第4図（2））

SH10北東方向に位置する南北6.3m、東西6.0mの方形プランを呈するものでSH3と重複する。SH1と同様東壁中央にカマドを有し、焼土が混入する。主柱穴も明確ではないが、北辺のものはSH3と重複している可能性もある。

#### SH3（第4図（3））

SH15北壁のラインが一直線上にのり、4主柱穴を残す。南北4.7m、東西5.8mの方形プランを呈するが、カマド及び焼土等の広がり確認されなかった。

#### SH4（第5図（1））

SH1とSH3との間にはさまれた位置にあり、3棟とも北壁のラインを一直線上にのせる。明瞭に4主柱穴を残す南北4.4m、東西5.0mの方形プランの住居跡で南壁中央にカマドを有し、煙道が壁より外へ出ている。主柱穴の中央でも若干の焼土を確認している。

なお、東コーナーで住居跡を切りこむSK1内から黒色土器（第11図28）が出土した。

#### SH5（第6図（1））

SH1～4より北西方向に位置する住居跡で13棟の住居跡の内、もっとも規模の大きいもので南北7.7m、東西8.0mをはかる。西コーナーは削平をうけているが、ほぼ方形を呈し東壁中央にカマドを付設し、西側の土壌にかけて広範囲に焼土が広がる。また、東コーナーでもレキに混じって焼土が検出され、須恵器の坏蓋・坏身がまとまって出土している（第6図(2)）。南壁から西壁にかけてL字状に壁溝が確認でき、いくつかの小ピットが付属している。

#### SH6（第7図（1））

南北6.5m、東西6.5mの方形プランを呈するが、西コーナーの掘り方は確認できなかった。中央から東寄り焼土が確認され、東コーナーを中心に土器の出土を見た。

#### SH7（第7図（2））

南北5.5m、東西6.0mをはかる方形プラン。主柱穴、カマド等は確認されなかった。

#### SH8（第7図（1））

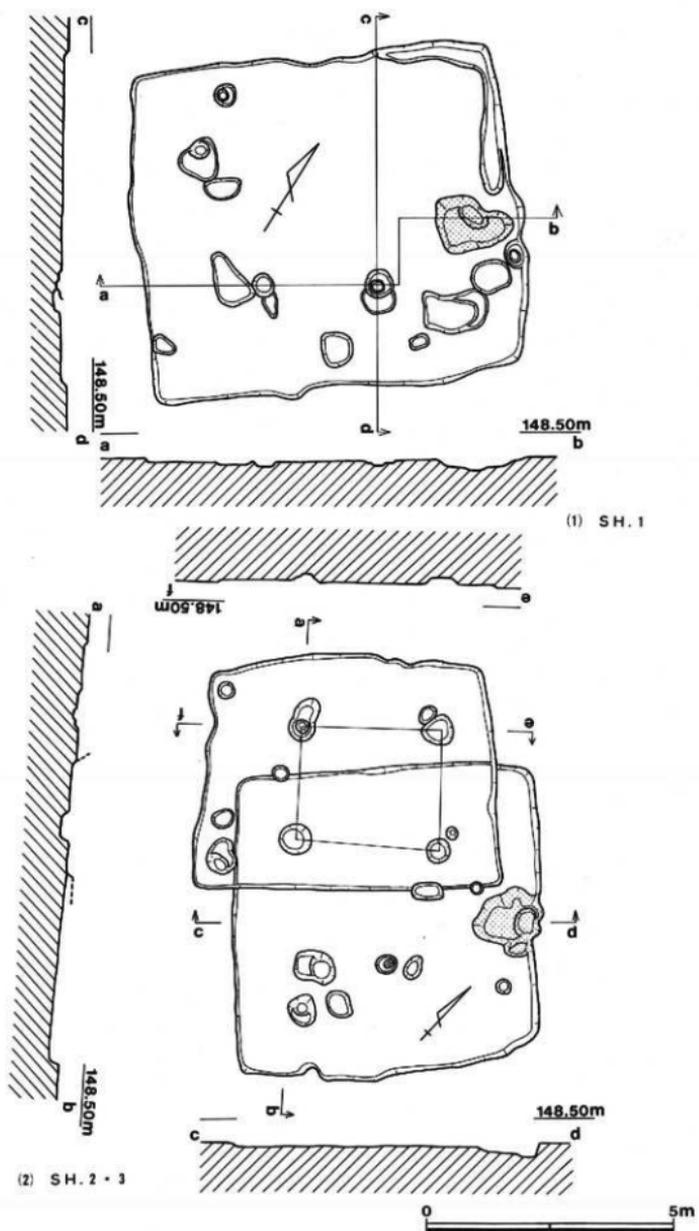
SH6の北東部と重複して位置する。南北3.2m、東西3.6mの隅丸方形に近いプランを有し、北コーナーでは支脚を伴ってカマドが観察された。南壁沿いでもわずかに焼土が確認できた。

#### SH9（第8図（1））

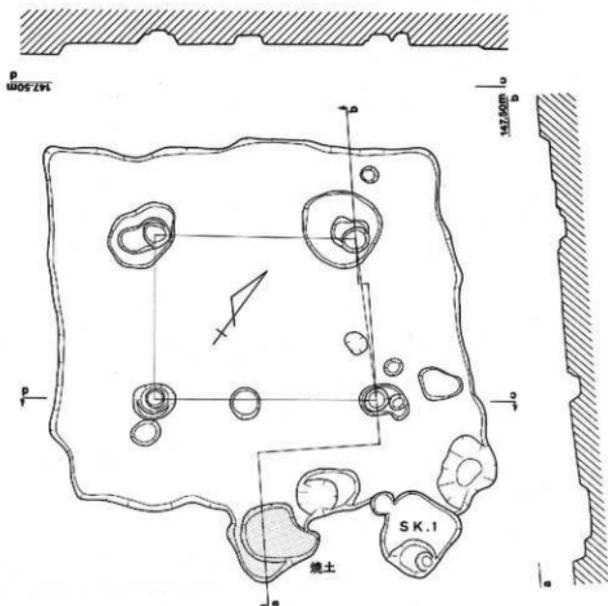
南北1.8m、東西2.2mをはかる方形プランの住居跡で東コーナーで焼土を確認している。主柱穴は確認できなかった。

#### SH10（第5図（2））

調査区の南端に位置する南北2.3m、東西1.7mの不定形のプランを呈する。東壁にカマドを有し、

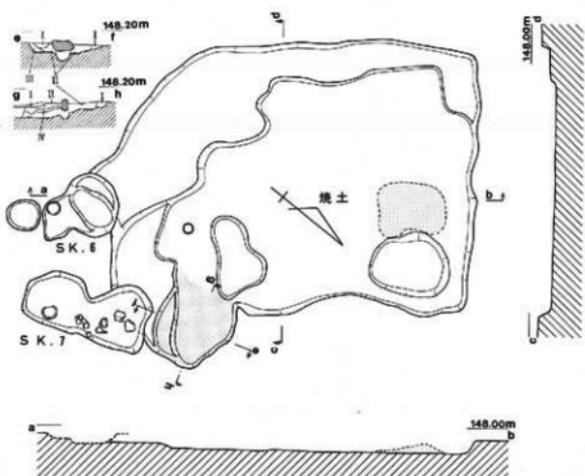


第4図 竪穴住居跡1) (SH1、SH2・3)



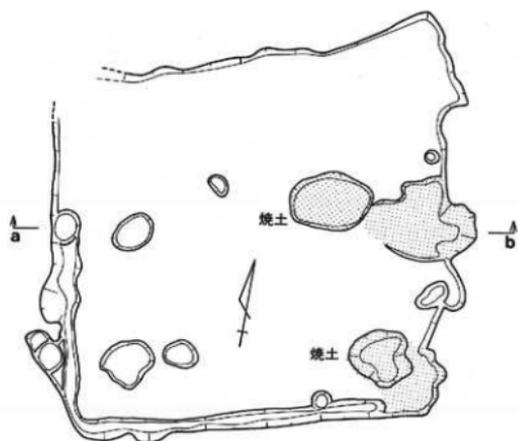
(1) SH.4

- I 黄褐色土 (焼土含む)
- II 茶褐色土 (焼土含む)
- III 茶褐色砂土
- IV 黒灰色土 (スミ含む)

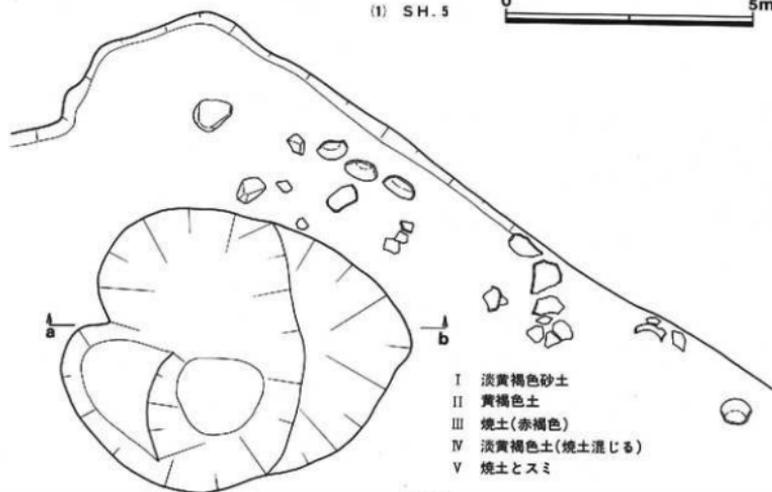


(2) SH.10

第5図 竪穴住居跡(2) (SH4、SH10)

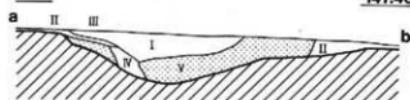


(1) SH. 5



- I 淡黄褐色砂土
- II 黄褐色土
- III 焼土(赤褐色)
- IV 淡黄褐色土(焼土混じる)
- V 焼土とスミ

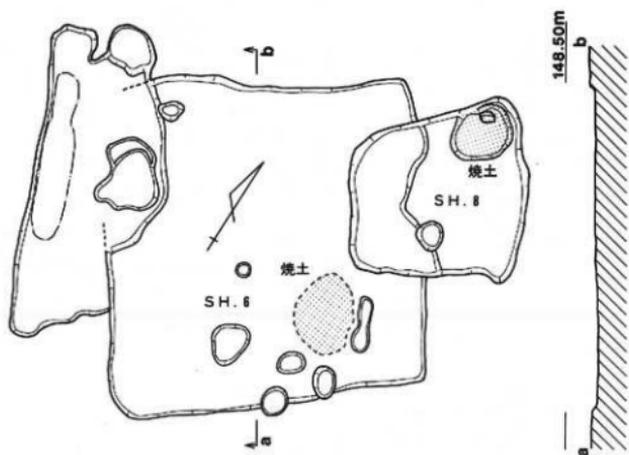
147.40m



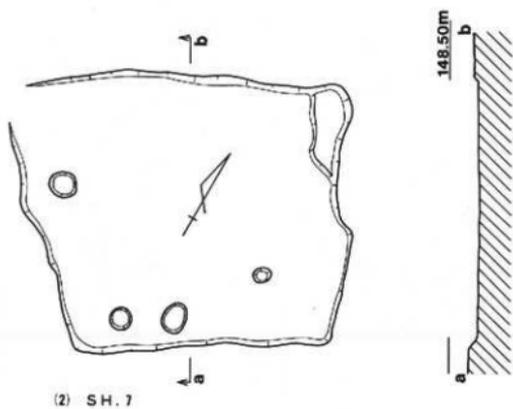
(2) SH. 5 東隅土器出土状況図



第6図 竪穴住居跡(3) (SH5 東隅土器出土状況図)



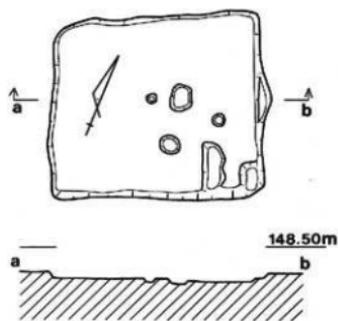
(1) SH.6・SH.8



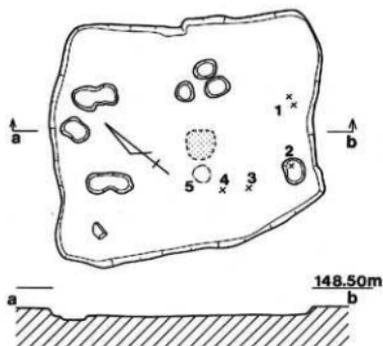
(2) SH.7



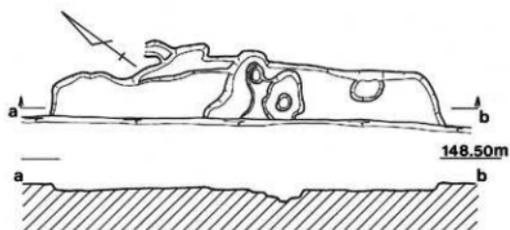
第7図 竪穴住居跡(4) (SH.6・8、SH.7)



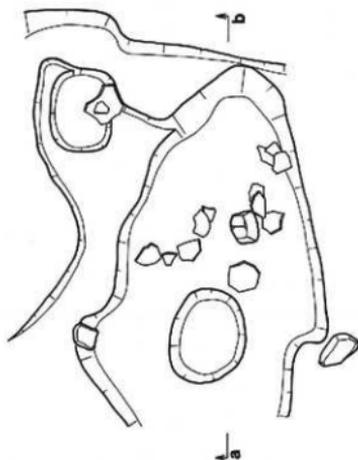
(1) SH.9



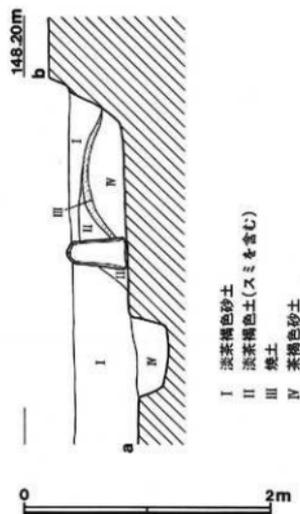
(4) SH.12



(2) SH.11

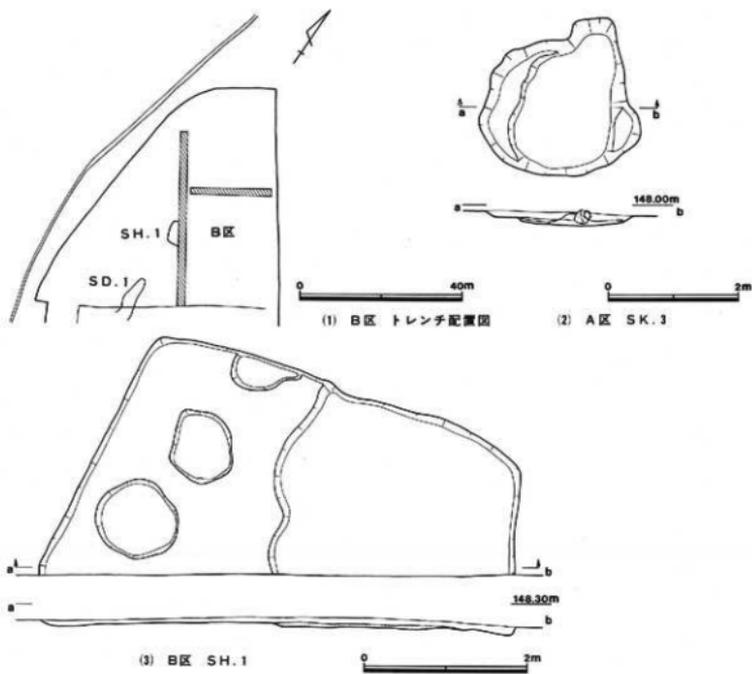


(3) SH.11 カマフ



- I 淡茶褐色砂土
- II 淡茶褐色土(スミを含む)
- III 粘土
- IV 茶褐色砂土

第8図 竪穴住居跡(5) (SH.9、SH.11 カマフ、SH.12)



第9図 B区検出遺構及びトレンチ配置図、A区SK1

支脚を残している。第5図断面e—fによる支脚は横倒しになっているが、本来は左を下にして倒立していたであろう。カマド周辺及び北辺部に焼土が広がる。

カマドの南側に土塊6・7が住居跡を切り込んでおり、完形に近い須恵器が共に出土している（第11図1・15）。

#### SH11（第8図（2））

調査区の西辺に位置するが、大半が削平をうけており東壁のみが検出された。南北は4mをはかり、東壁中央にカマドを有する。

第8図（3）のカマドの実測図によると煙道が若干壁外にとび出し、土師器甕が焼土内に包含されている。また、中央に三角錐に近い支脚が残り、これを中心に他2点の石が三角形に並び、

#### SH12（第8図（4））

SH5の南端に壁面を接するように位置する南北1.5m、東西2.3mの方形プランの住居跡である。支柱穴は確認できなかったが南壁寄りに1～5の小型丸底甕が床面より検出され、中央には焼土が広がる。

また、西コーナー寄りには、長辺35cm、短辺25cmの平坦な石が床面に貼り付いており、表面には磨耗の痕跡が残る。

#### SH13

SH3の北西側に位置するが、全体に床面の残りが浅く南壁と西壁の掘り方のみ確認できた。南壁の中央には直径50cm、深さ40cmの掘り方があり、焼土と多量のスミが内部につき、また、甕が包含されていた。また、東壁中央にも焼土が広範囲に広がっている。

以上の比較的明確な竪穴住居跡13棟の他にSH12の南西の不定形土塊、SH6の西側の遺構、SK3によって切られる遺構等は、プランや検出状況から住居として確定する要素に欠ける。しかし、SH6西側の遺構は須恵器、土師器長胴甕が集中して検出されており、スミも若干認められることから住居跡として認めてよいかもしれない。

#### SK2

SH7の北西側に位置し、南北0.9m、東西0.5mのだ円形の土塊であり、埋土は茶褐色土に焼土・スミがまだら状に混入している。他の遺構の埋土にくらべ焼土の量が非常に多い。

#### SK3（第9図②）

SH1とSH9との間に位置し、南北1.2m、東西1.4mをはかる不定形の土塊である。埋土は茶褐色砂土で間にスミの層が堆積している。土塊内には須恵器を含まず、土師器の壺・甕・小型壺・高坏・鍋等が包含していた。

#### B区

B区は全体に現地地形においてもA区より一段低い水田部分にあたり、遺構面はすでに削平をうけていたらしく、耕上下はレキを含む黄褐色土となり遺構の残存度は低い。

そこでB区中央に南東から北西方向にかけてと、南西から北東方向へ土層確認のためのトレンチを設定したところレキを含む黄褐色土下には砂レキ層（こぶし次のレキ）あるいは砂層が堆積し、遺物

は出土しなかった。

#### SD1

南から北方向へのびる幅4m、長さ15m、深さ0.3mの溝状遺構を確認した。若干弯曲しており、本来は円形のプランを呈していたかと予想される。溝内は茶褐色砂土であり、レキを多く含み、須恵器が比較的多く出土している。

#### SH1

土層確認のトレンチによって東半部を切断してしましたが、南北5.1mの方形プランを呈する住居跡を確認した。床面までは深さ10cmと非常に浅く、床面にスミの堆積が認められる。

#### 出土遺物

出土遺物は、土器類がコンテナ30箱、石製品が7点ある。土器類は破片が多いが、ここでは住居跡出土の例で図示可能なものについてその概要を述べる。

##### (a)須恵器(第10・11図)

須恵器は、坏蓋・坏身・有蓋高坏・横瓶・壺類がある。

坏蓋は、口径12.8～16.0cm程度、器高4.2～5.2cmをはかる。天井部と体部とを分ける稜線の明瞭なもの(第10図3・19・20)と境に段がわずかに残るもの(1・5・9・10・14・18)と稜線の明瞭でないもの(2・4・6～8・11～13・15～17・21)とに分けられる。相対的にみて19・20以外は天井部がふくれて丸味を帯びている。しかし、口縁端部には内傾する面あるいは平坦面が全体的に残っている。また、全体に天井部外面は回転ヘラケズリによって仕上げる。色調は暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。

22～25は有蓋高坏の蓋であるが、天井部に中くほみのつまみが付き、天井部と体部との境は不明瞭で丸味を帯びる。天井部は回転ヘラケズリ調整である。

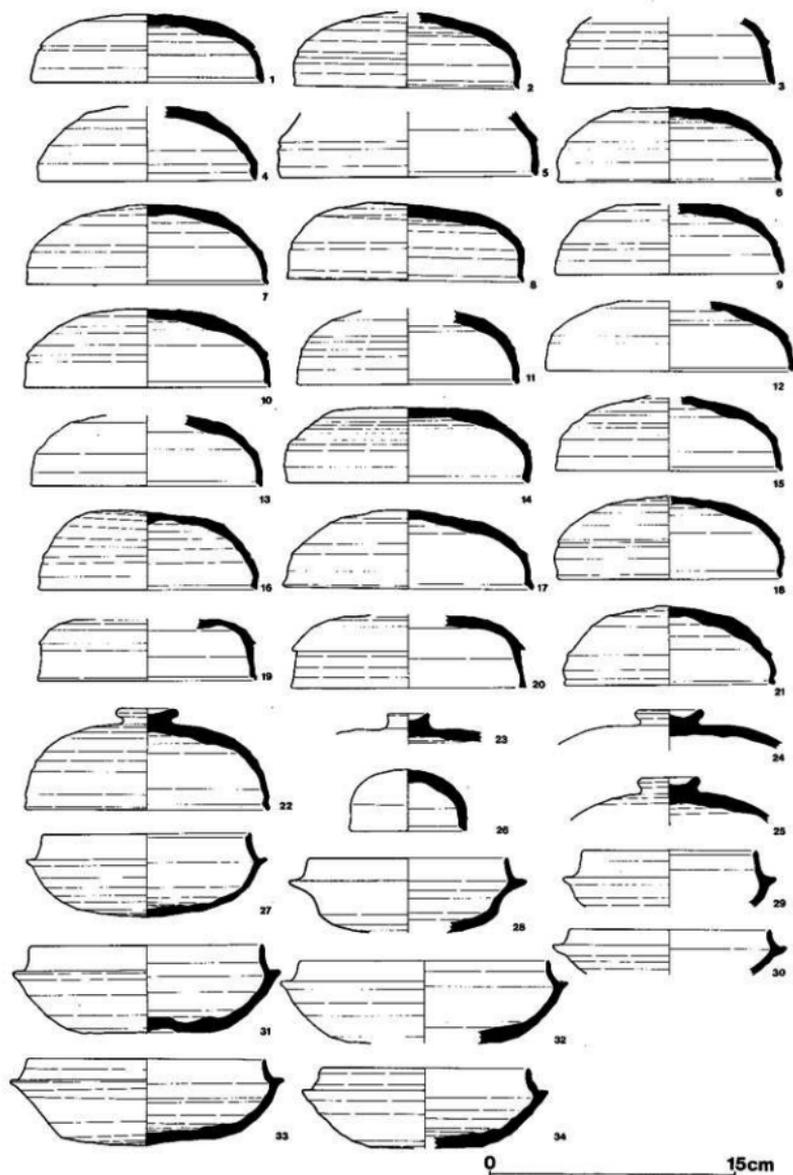
なお、26は遺構検出時にSH13の東側で遺構面上より検出されたもので坏蓋と考えるとよいものであろうか。口径7.0cm、器高3.8cmと小型で全体に器壁が厚く、口縁部内外面はヨコナデ調整で端部に内傾面を有し、暗灰褐色を呈する。

坏身は、口径10.4～15.0cm、器高4.0～5.4cmをはかり、第10図27・29、第11図1は口縁部の立ち上がり直線的で端部に内傾面をもつ以外は全体的に立ち上がりは内傾気味で端部も丸くおわる。受部は外上方あるいは水平にのび、第11図1以外は端部の稜があまりない。底部も全体的に扁平な感じで回転ヘラケズリ調整を残すが、その範囲はせまい。

第11図10～16・18・19は有蓋高坏であり、10・11のように器壁が薄く小型のものと13～16・18・19のように大型のものに分けられる。10・11はSH1からの出土で口縁端部に内傾面を有し、扁平な底部に3方透しの低い高台を付する。これに対し、13・16は脚部外面はカキ目調整で円形ないしは方形の透しをもち、長脚化の傾向を示し、受部の形態は坏身のそれをうけつづく。

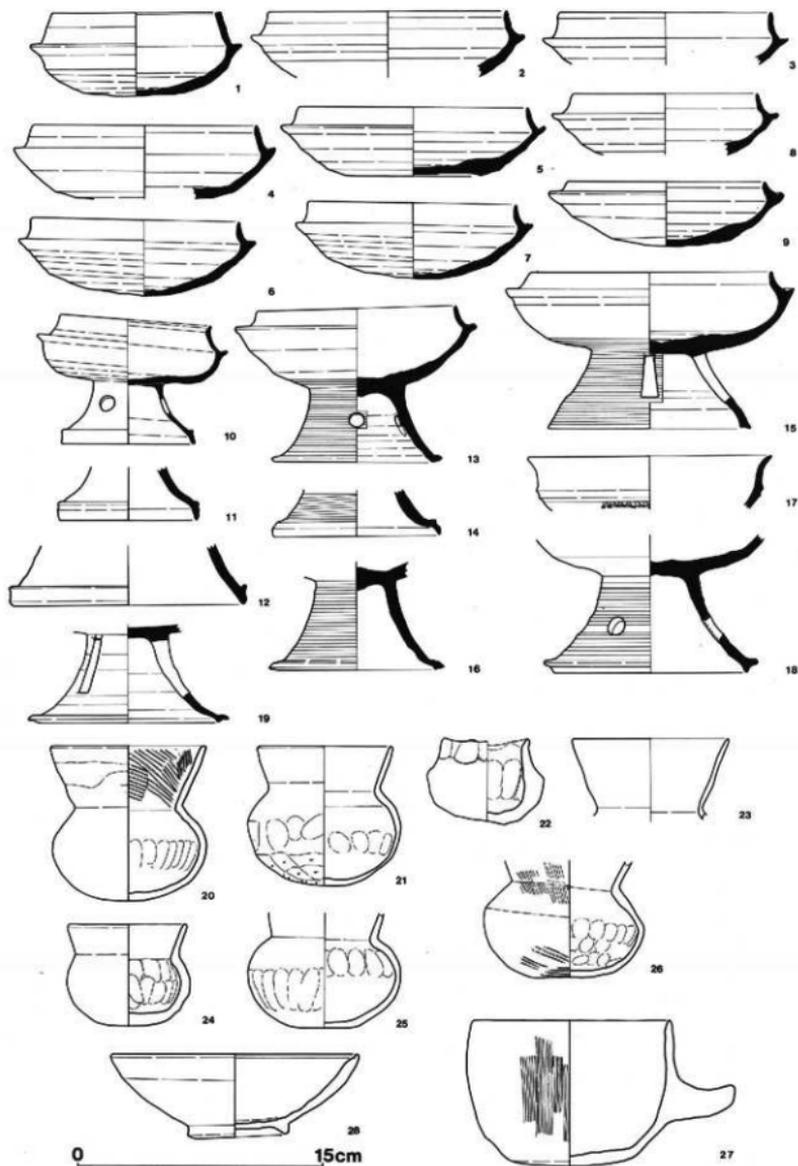
なお、17は無蓋高坏の口縁部で外反し、外面に波状文を施す。

その他にSH6の東コーナーより横瓶(図版十四-10)が出土しているが、体部のみ残存していた。



第10図 出土土器(1) 須恵器

1・27-S.H.1, 2・28-S.H.2, 3・4・29・30-S.H.4, 5・6-S.H.5, 7・31・  
32-S.H.6, 8・33・34-S.H.8, 9~11・22・24・25-S.H.10, 12-S.H.11, 13-S  
H.12の西の土器群, 14・15-S.H.12, 16・17-B区SD.1, 18~21・23・26-遺構面

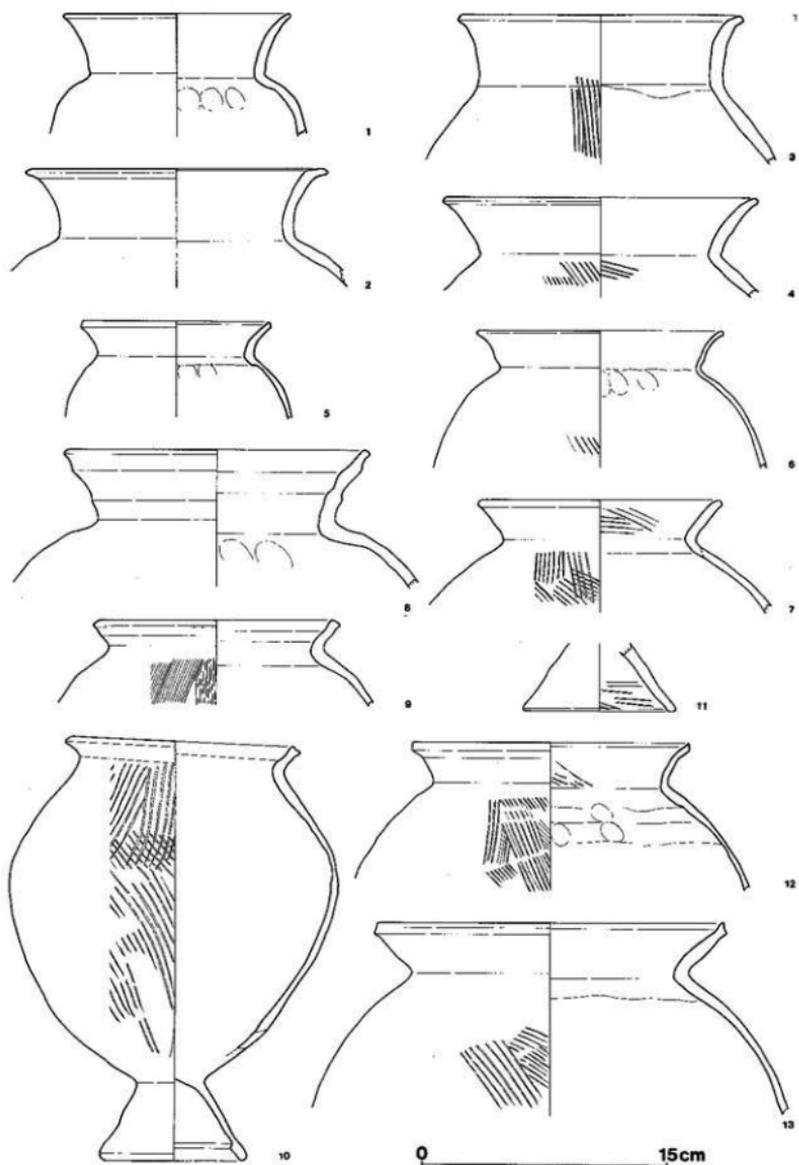


第11図 出土土器(2) 須恵器・土師器・黒色土器

須恵器 1-SK.8、2・3-SH.10、4-SH.12の西、5・13-SH.6の西土器群、  
6~7・18-B区SD.1、8~9・16-17-A区造構面、10・11-SH.1、12-  
SH.5、15-SK.7、14-SH.8、19-SK.5

土師器 20・21-SK.3、22-27-SH.2、23-SH.11、24~26-SH.12

黒色土器 28-SH.4を切るビット



第12圖 出土土器(3)(土師器)

1・3—SH. 8、2・4—SH. 4、5・8・13—SH. 1、6—SH. 11、7・10・12—SK  
3、9—SH. 2、11—SK. 7

(b)土師器 (第11~13図)

土師器は、全体的に残存状況があまり良好とはいえず、表面は磨滅が著しく調整の明瞭なものはない。器種には壺、甕、高坏、小型壺、把手付鉢、鍋、甕がある。

第11図20・21・23~26は、いわゆる小型丸底壺で口径と体部の最大径とがほぼ等しいものである。20の内面及び26の外面はハケ目調整、21の底部外面にヘラケズリ調整を施す。なお、SH12の東半部床面に小型丸底壺5点が出土した（そのうちの2点が24・25）。

また、22は手づくねの小型壺で口径5.0cm、器高5.2cmをはかり内外面に押え痕が残る。

27は把手付鉢で口径12cm、器高9.2cmをはかり、片側に把手を付す。

壺類は口縁部のみで形態上の壺との判別が難しいが、第12図1~3・8、第14図1がそれに相当する。第13図1は口縁部と体部との境のくびれが強く、口縁部は大きく外反する。3・4も外反する口縁部を有し、口縁部内面にやや平坦面をもつ。8は外反する口縁部の外側に稜をつくり、内側にあまい段をなす。奈良県上ノ井古墳井戸SE030上層出土の壺Aに類似しており、長胴の体部が付すと思われる。

甕類は口縁部形態に比較的多様なバリエーションがある。単純にくの字状口縁のもの（第12図4・6・7、第13図1・2）、くの字状口縁で口縁部を上方へつまみ出すもの（第12図5・12・13）、口縁部があまい段を形成するもの（9・10）、長胴の体部に外反する口縁部のつくもの（第13図4）がある。

なかでもくの字状口縁のものは、第13図1・2のように体部は球形を呈すると思われる、外面に粗いハケ目調整を残す。また、第12図10はSK3からの出土で肩の張った体部に八の字状に開く脚部を付し、外面を粗いハケ目で仕上げる。胎土も暗褐色を呈し、他のものと異なることから、東海地方からの搬入品の可能性もある。このタイプの甕の出土例は湖東地方では比較的稀である。

高坏は第13図5~8がある。5は直線的な受部底から外上方へ大きく外反する口縁部が付き、端部がわずかに上方へつまみ出される。内外面はハケ目調整である。これに付し、受部が碗形に近くなる6・7があり、口縁部は直線に近い。8のように屈曲して八の字状に開く脚部に続くと思われる。

鍋（第13図3）は、口径21.3cm、器高12.4cmをはかり、くの字状口縁に浅い体部が付き、外面はハケ目調整である。

第13図9は甕で、SH13の焼土墳内から出土し、口径27.4cmをはかり直線的にのびる体部に把手が付く。

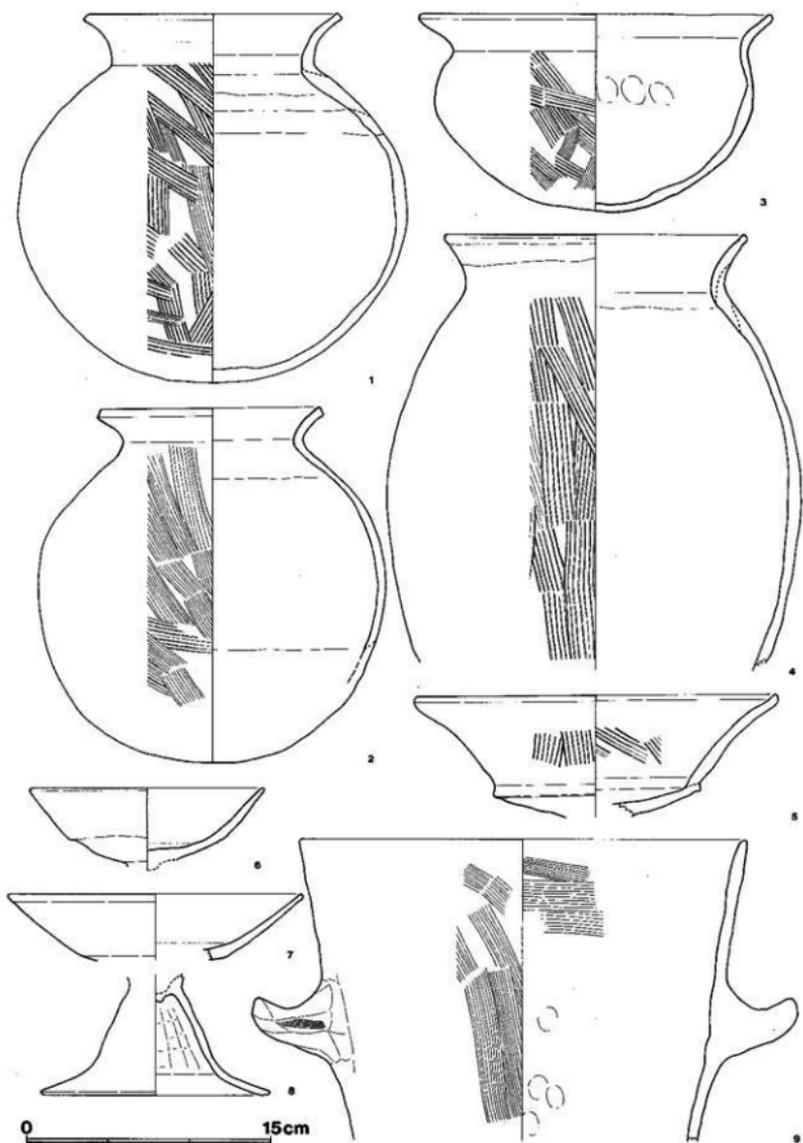
(c)黒色土器 (第11図26)

SH4を切る土壌SK1より出土した。つくりは雑で、口縁部内面に沈線がめぐり、やや扁平な高台を付す。内外面のヘラミガキは磨滅が著しく確認できなかった。大橋信弥氏の論考<sup>(5)</sup>に基づくならば、杉江遺跡例に相当し、12世紀前半代に比定されている。

(d)石製品 (第14図)

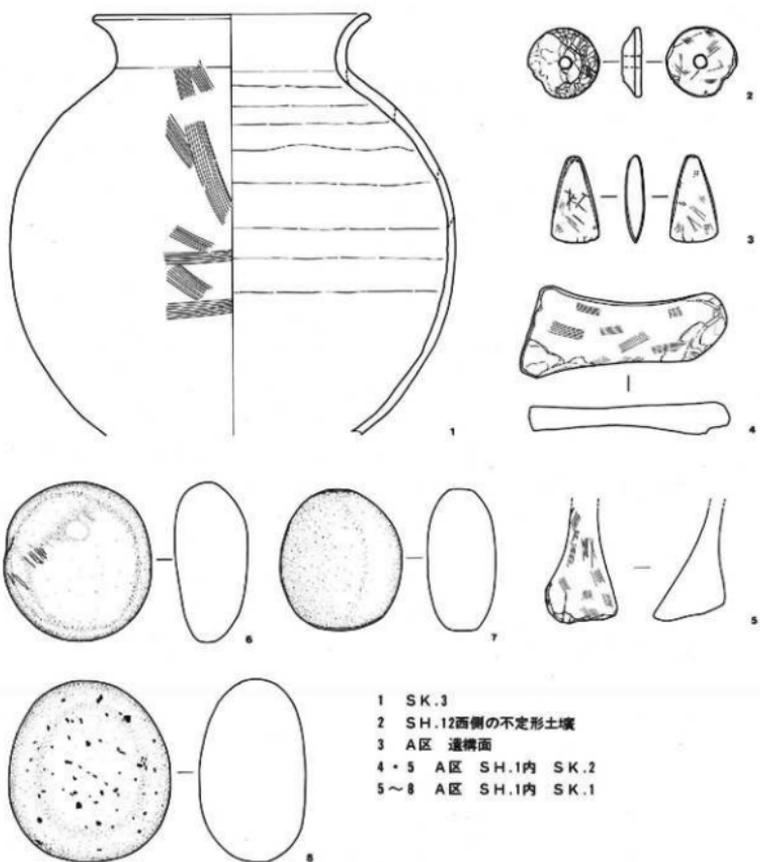
2は石製紡錘車でSH12西側の不定形土墳内から出土し、直径4.3cm、厚さ1.2cmで中心に直径0.7cmの穿孔がある。

3の小型石弁は非常につくりが丁寧で全長5.4cm、最大幅3.1cmを数え、遺構面上から出土している。



第13図 出土土器(4) (土師器) I

1~3・5・6-S.K.3, 4-S.H.6の西の土器群, 7・8-S.H.11, 9-S.H.13



第14図 出土土器(5) (土師器)、石製品

4・5はSH1の土壌より出土した砥石、6～8は同じSH1内の土壌出土のすり石であり、3個並んで検出され、表面はかなり磨滅している。(吉田)

### 3. まとめ

以上が、発掘調査によって得られた資料・成果の概要であるが、最後に遺構・遺物の編年的位置付けを行い、遺跡の性格等について簡単にふれておきたい。

竪穴住居跡は、15棟確認できたわけであるが、明らかにカマドを有するものは9棟を数え、その位置は東壁中央に多い。残存状況があまり良好とは言えないため、その構築構造を再現することは難しいが、側壁は検出できず、築土が水平に堆積しているのみであった。また、住居跡の方向性からSH1～4・6・12・13とそれ以外のものの二群に分けることができる。

SH12の西コーナーより扁平な石が<sup>(4)</sup>検出されたが、これは木流遺跡S B01、05内出土の河原石に類似する。報告書によればワラ打ち等の農作業に使用したと予想されている。

編年的位置付けは、出土須恵器の坏蓋の天井部が比較的丸味を帯びることと口縁端部に内傾面を残すこと、坏身のたち上がりは内傾し、端部が丸く外面のヘラケズリ調整の範囲が狭いことなどからして相対的に陶邑編年のTK-47～TK-209の頃、すなわち6世紀初め～7世紀初めが与えられるが、その内でも6世紀中頃(MT-15; TK-10)がこの遺跡の最盛期であったと予想される。最近の調査では神崎郡五個荘町木流遺跡S B01・03、平坂遺跡S B01の<sup>(4)</sup>時期に相当する。また、住居跡の前後関係は判断し難いが、出土遺物からみてSH1が他のものに先行する。SH2はSH3に先行、SH6はSH8に先行する。

SK3は須恵器を含まず、土師器から判断して他の遺構より最も早く構築されたと思われる。口径と体部の最大径がほぼ等しい小型丸底壺、くの字状口縁で端部が上方へつまみ出される鬘から判断して庄内式併行期までさかのぼるとみてよからう。藤原宮内裏東外郭地域出土の資料に<sup>(8)</sup>類似している。しかし、台付臺は口縁部の屈曲は弱く器壁が厚手で外面のハケ目も粗い。脚部内面の折り返しは残っており、これらの特徴からみて安達厚三、木下正史氏の<sup>(9)</sup>論考に基づくならば、IVB類の平城京跡第70次調査例のものに相当する。

このように田寺・下森遺跡は古墳時代後期を中心として営まれた集落であったと予想され、その範囲は調査面積の制約もあって判然とはしないが、遺物の散布からみて両側へも広範囲に及ぶとみられる。なかでもSH1・5はその規模が他にくらべて大きく集落内で中心的な役割を果たした家族集団のものかと予想される。田寺・下森遺跡の東方には同時期の集落跡の内池遺跡とその集団の墓域と思われる小御門古墳群が立地するが、これとは別の小地域集団がこの田寺・下森遺跡を中心に拍頭し、北東部の小御門丘陵上に新たな墓域を形成していたと思われる。また、日野川流域は、現在の近江八幡市から蒲生郡・日野町をへて水口町方面へ通ずる交通上の要地であり、当時においても重要なルートであったと考えられる。今後もこの日野川流域において各時代にわたる集落遺跡の存在が明らかにされるであろう。(吉田)

注

- (1) 「第3章内池遺跡」[ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-5-2] 滋賀県教育委員会・勸励滋賀県文化財保護協会 1982年
- (2) 『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』滋賀県教育委員会 1966年
- (3) 『日野町大谷古墓出土「葦骨器展」』日野町教育委員会 1974年  
『近江出土の施釉陶器——多彩釉、緑釉、灰釉、瀬戸、美濃——』滋賀県立近江風土記の丘資料館 1986年
- (4) 『木流遺跡・平阪遺跡』(五箇荘町文化財調査報告書4) 五箇荘町教育委員会 1985, 3
- (5) 「藤原宮内裏東外郭地域S D、527出土の土師器」[飛鳥・藤原宮発掘調査概報] I 1971年
- (6) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第二巻 1974年

圖 版



調査前全景(南東より)



34トレンチ(試掘)



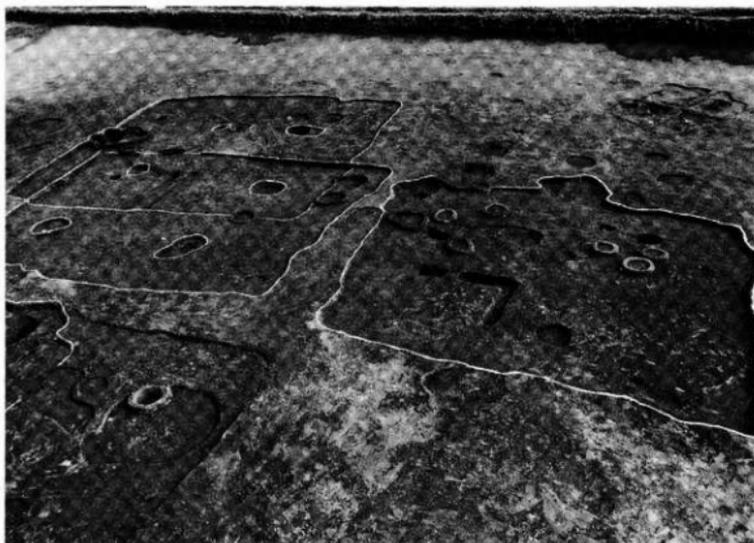
A区 航空写真



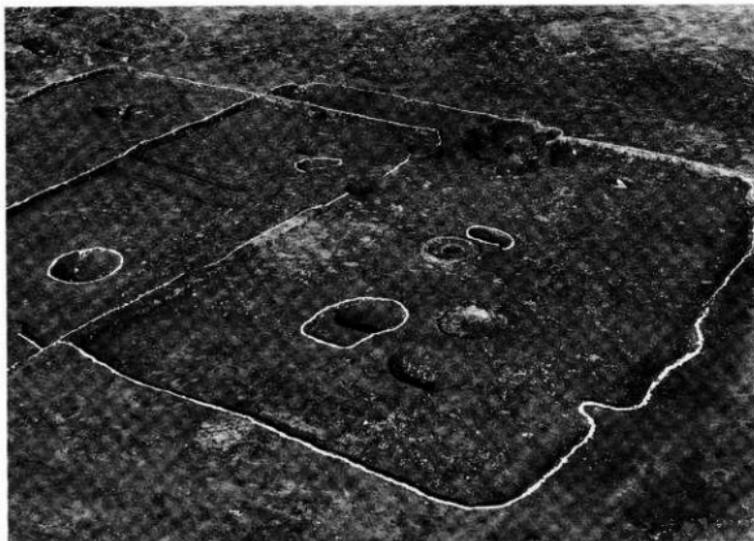
調査風景



A区 南半部 遺構検出状況



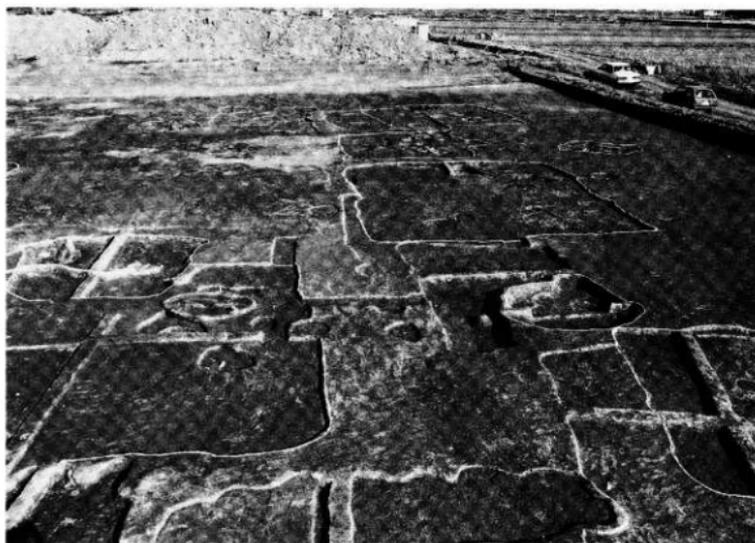
A区 SH. 2~4



A区 SH.2 (南西より)



A区 SH.3 (南西より)



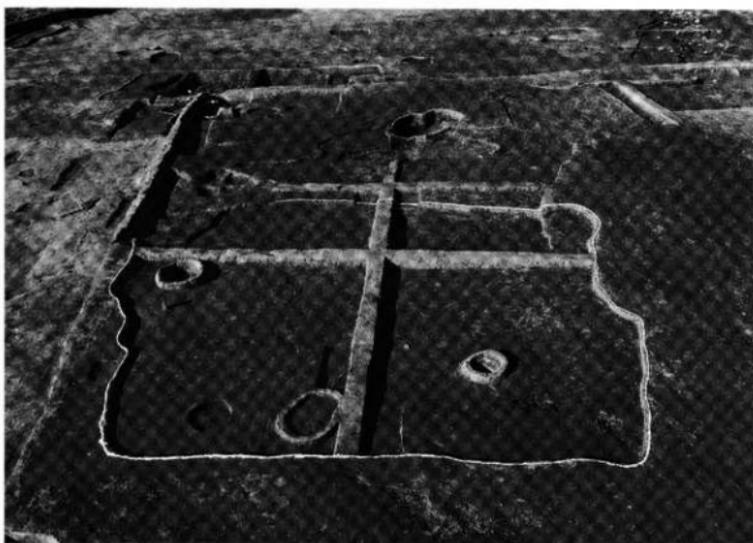
A区 南半部 遺構検出状況(西より)



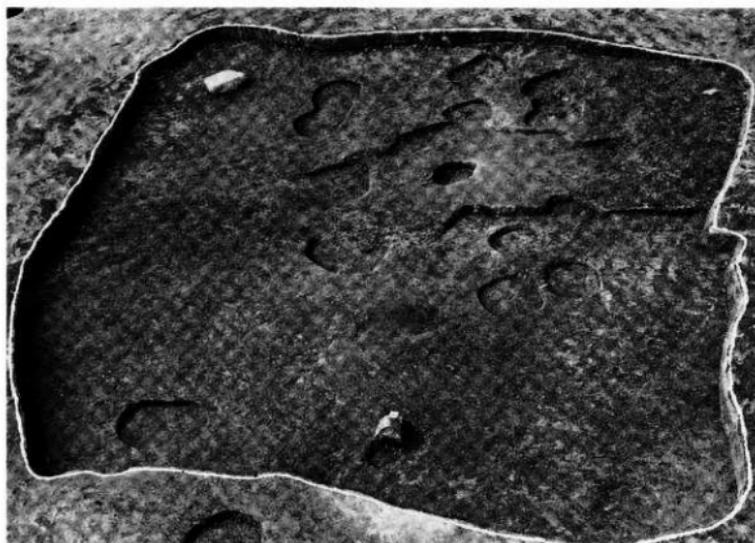
A区 SH.4(北より)



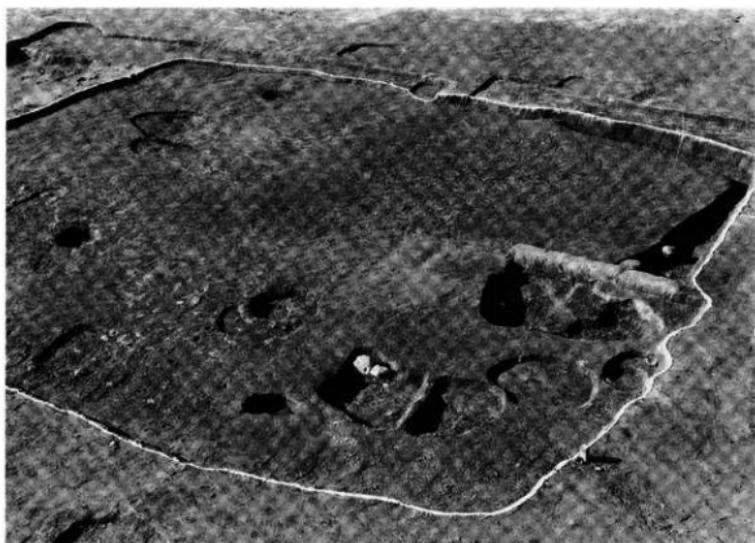
A区 SH.10(西より)



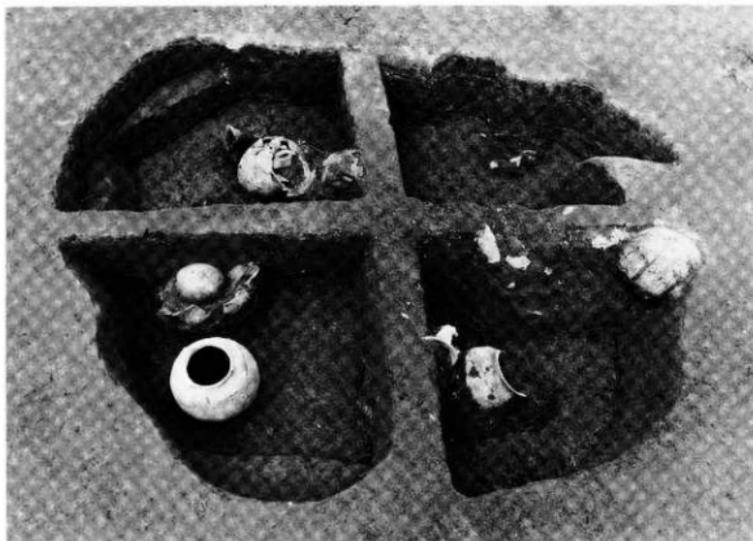
A区 SH.7(南より)



A区 SH.12(南より)



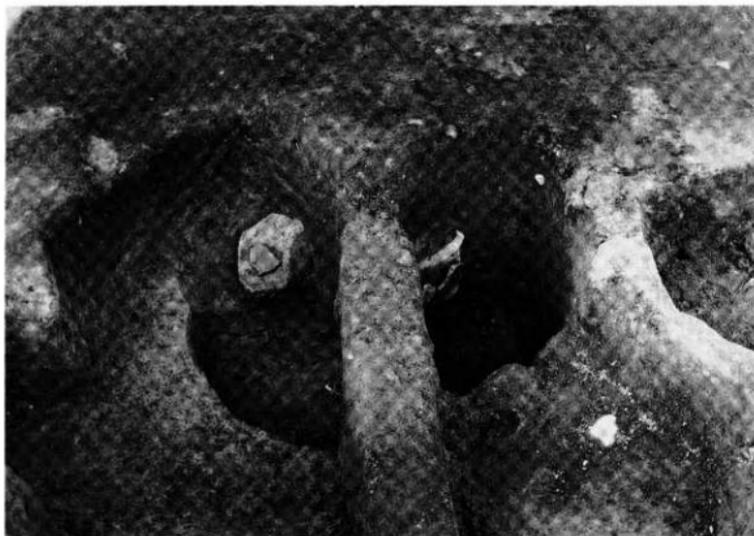
A区 SH.1(南東より)



A区 SK.3



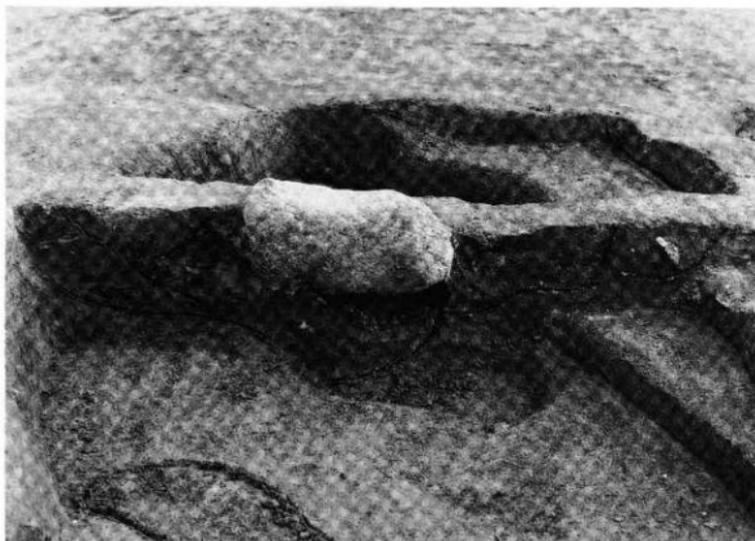
A区 SK.3内出土土器



A区 SH.2 カマド



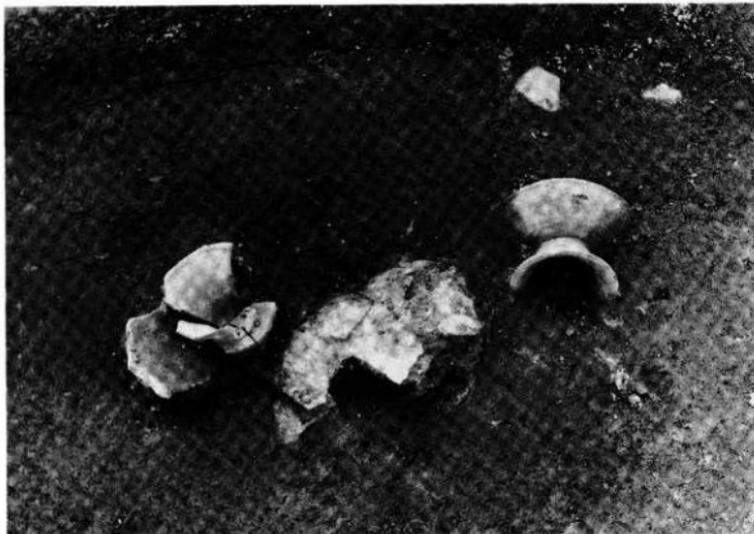
A区 SH.11 カマド



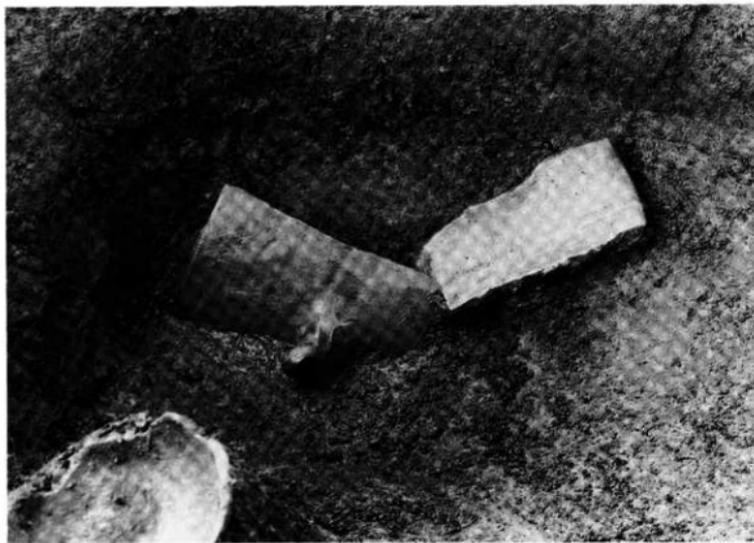
A区 SH.10 カマド



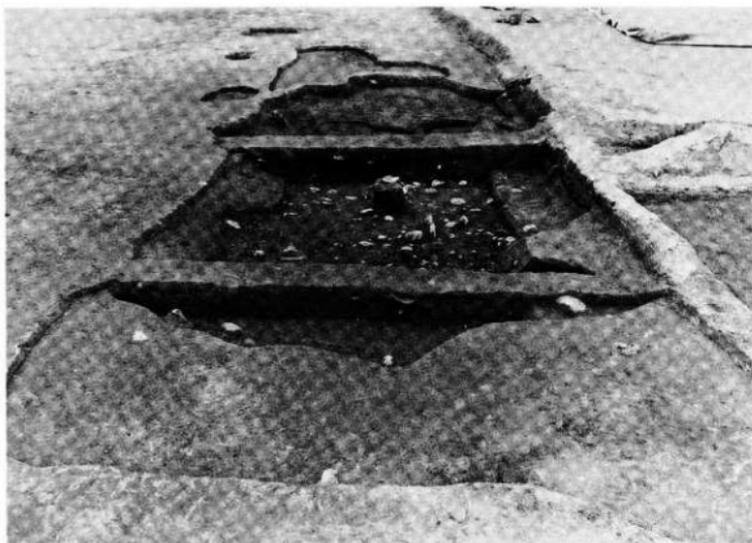
A区 SH.5 カマド



S.H. 6の西の土器群



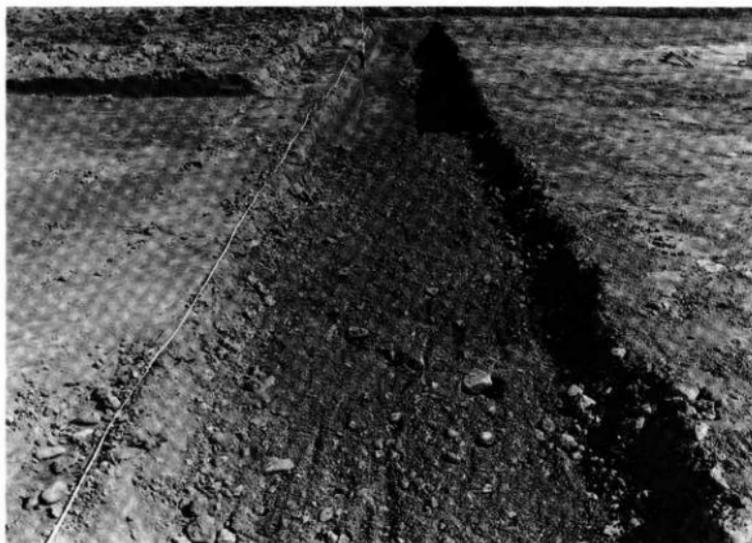
S.H. 13の焼土塊



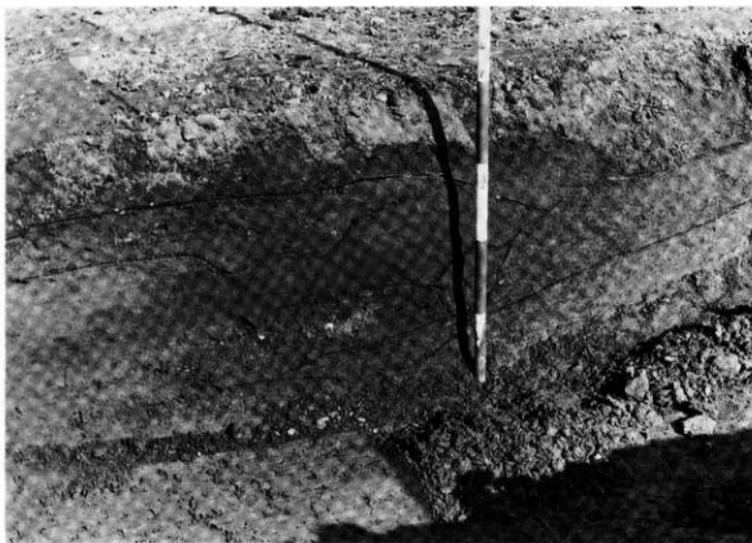
B区 SH.2



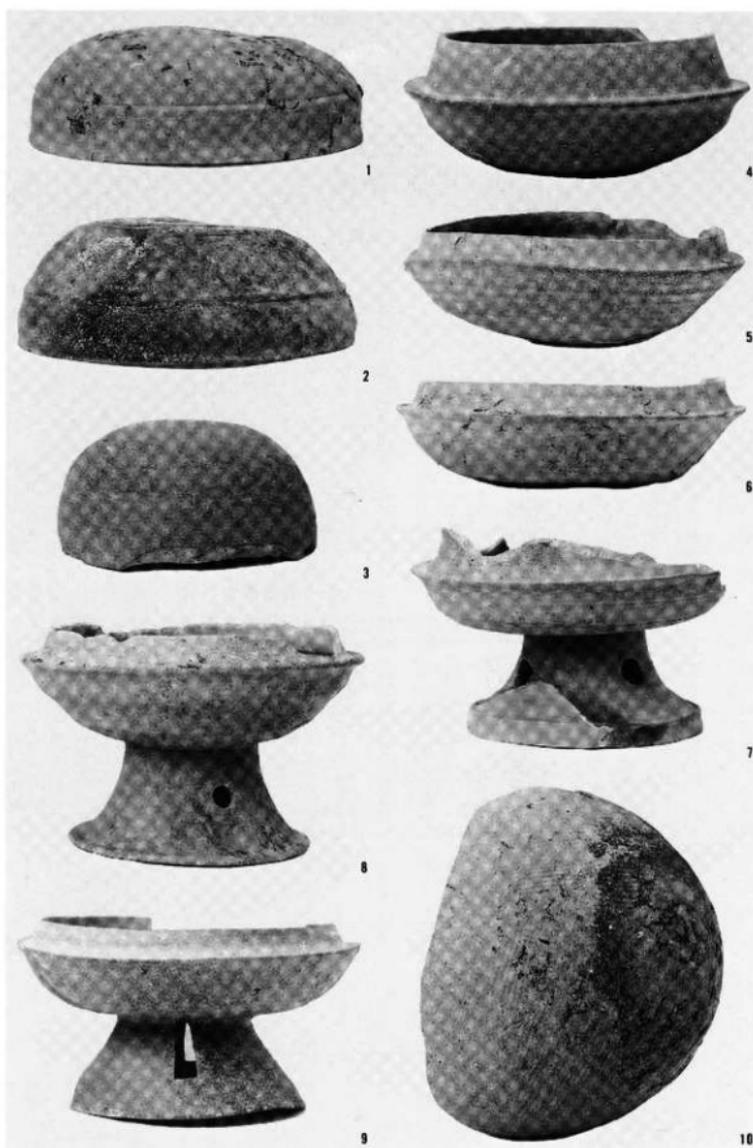
B区 SH.1



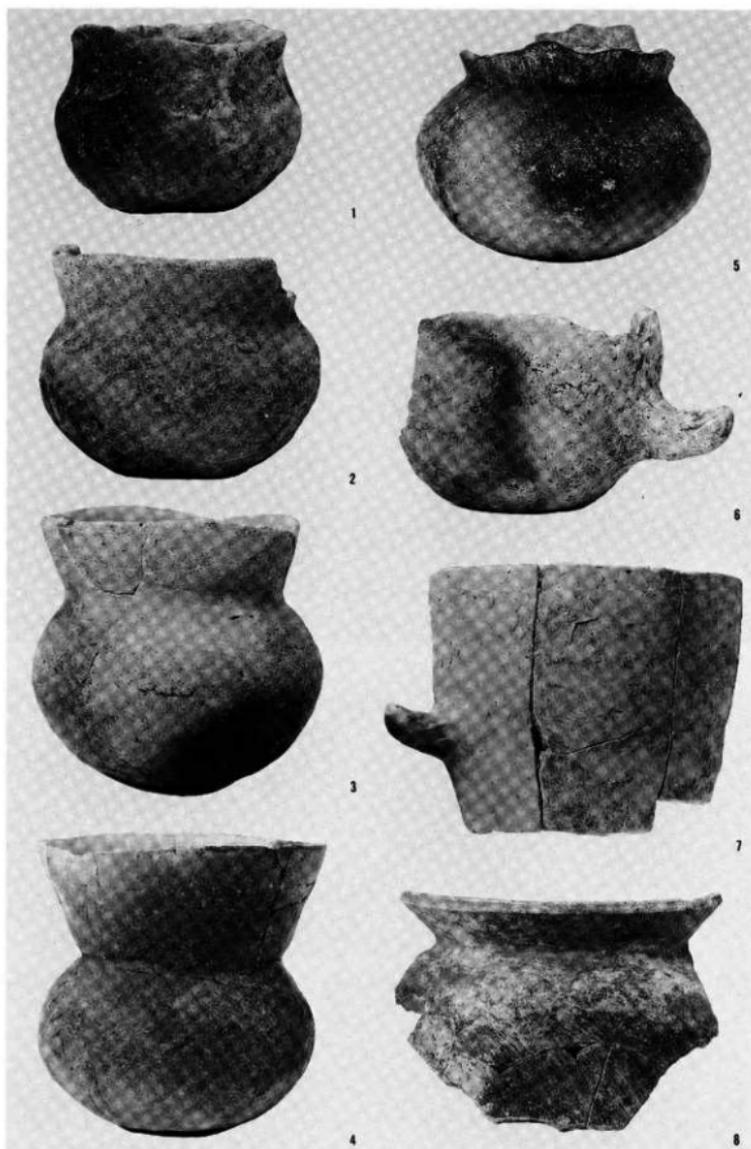
B区 土層確認トレンチ



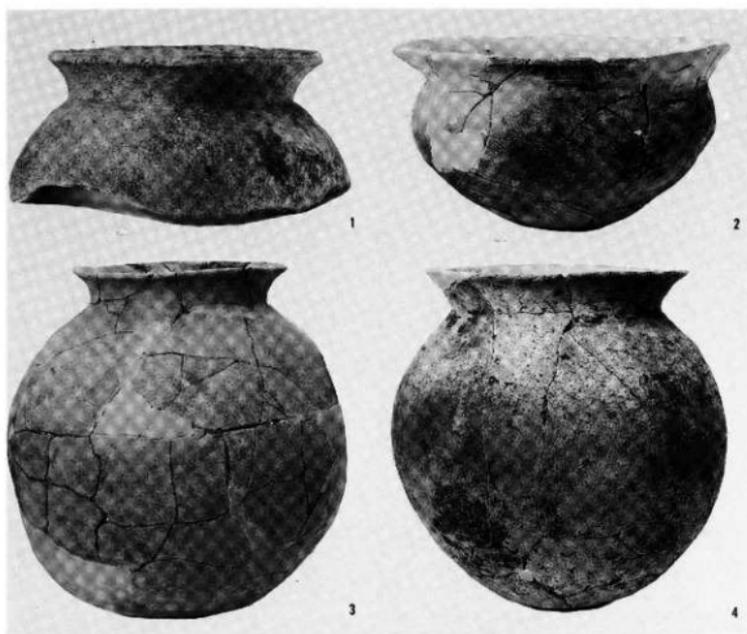
B区 土層断面



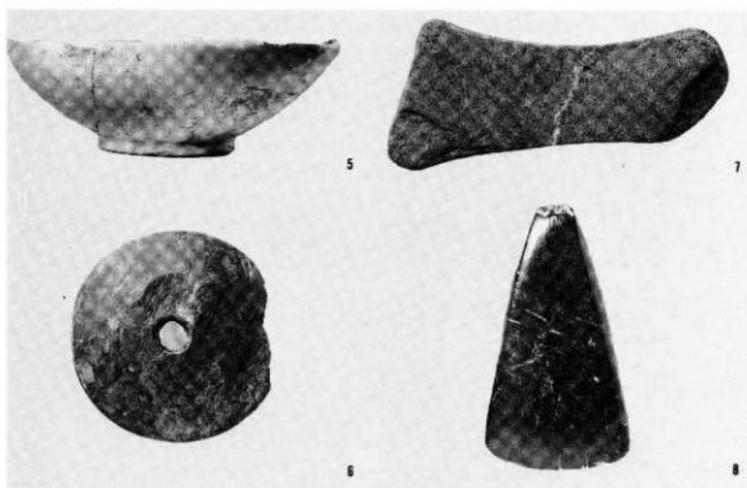
須惠器 1 SH.1 2・5 SD.1 3 遺構面 4 SK.6 6 SH.6  
 7 SH.1 8 SH.6の西土器群 9 SK.7 10 SK.6



須恵器 1・6 SH.2 2・5 SH.12 3・4 SK.3  
7 SH.13 8 SH.1



土師器1~4 SK.3



黑色土器5(SK.1) 石製紡錘車6(SH.12西側の不定形土塊) 礫石7(SH.1) 石斧8(遺構面)

---

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIII-3

(昭和61年3月)

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課  
大津市京町四丁目1-1  
電話 0775-24-1121 内線 2536  
滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大堂町1732-2  
電話 0775-48-9780・1  
印刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3-18  
電話 0775-33-1241

---